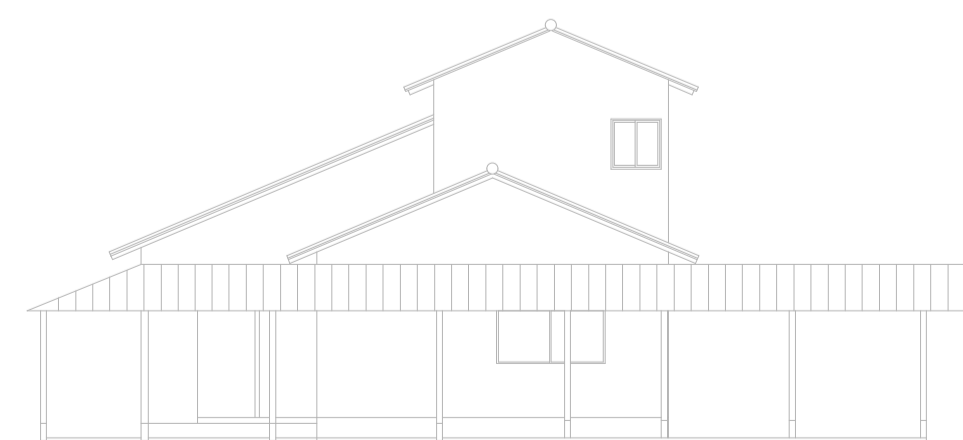
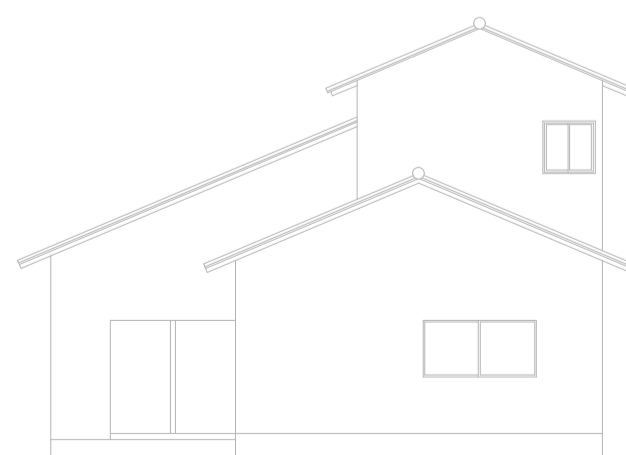


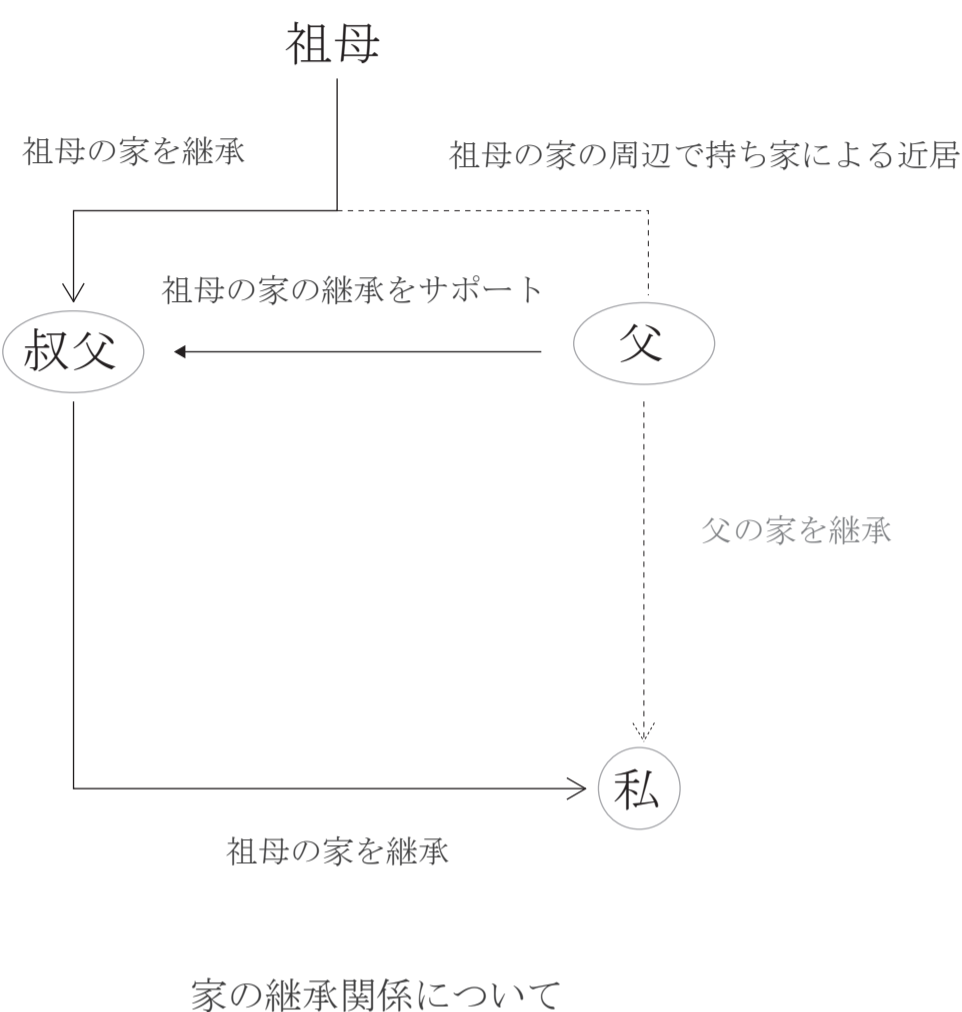
風景の道しるべ

— 太子町大道地区における2つの継承問題に応答する「自律的更新」のプロセス —



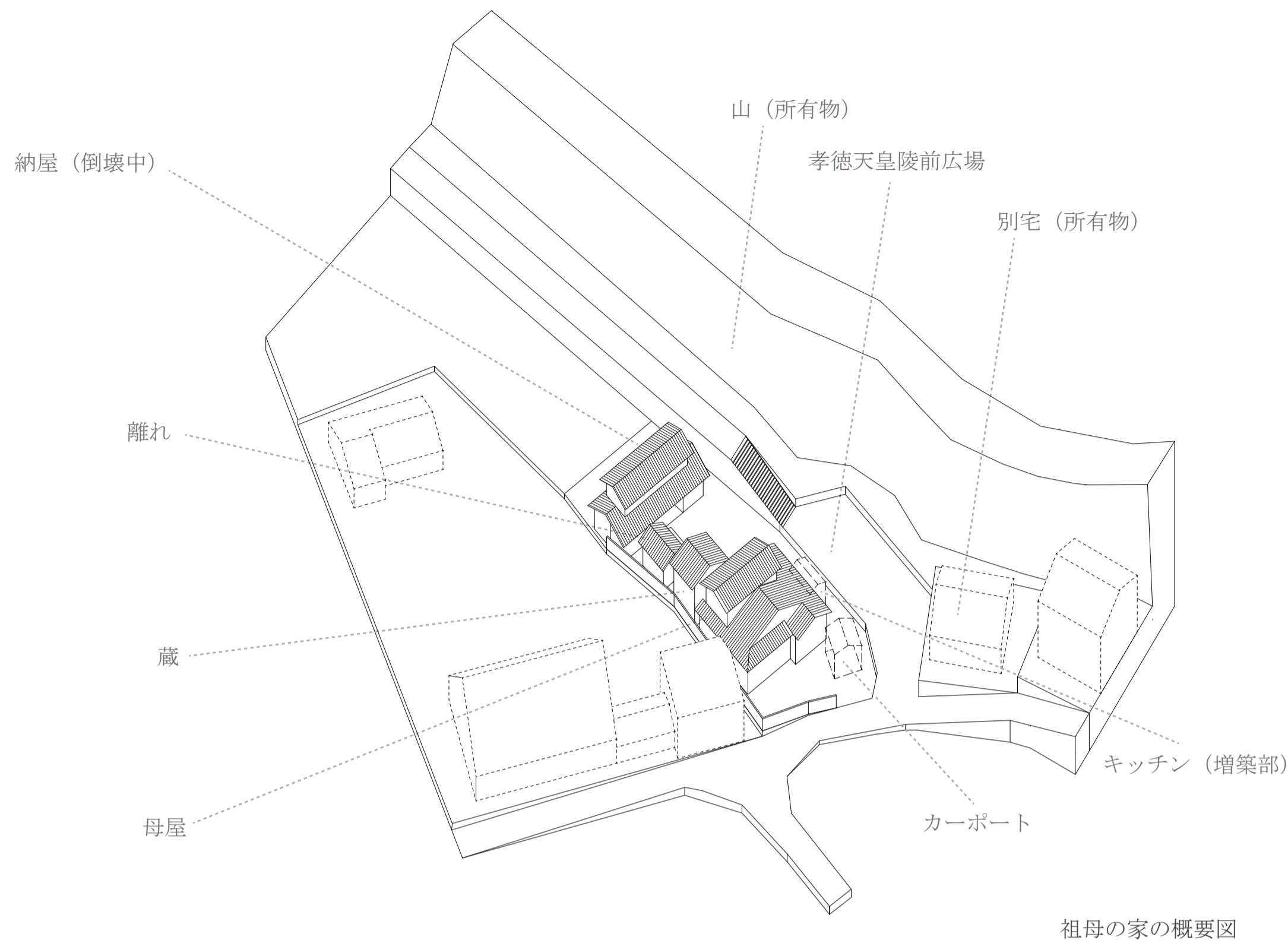
1. 祖母の家の継承

私は、将来的に祖母の家や土地を継承することになっている
祖母の家は、歴史的街道である竹ノ内街道における、大道地区という大阪府と奈良県の県境に位置している。



1-1. 広い土地と家の管理不全

現状としては、祖母と叔父の二人暮らしであるが
広い土地であることや現代的な家比べて大きすぎる
ことによって管理が行き届いていないところが目立った



祖母の家の概要図

1-2. 世代や立場によって異なる「祖母の家」への距離感と現実

叔父：居住の限界と破綻の予見

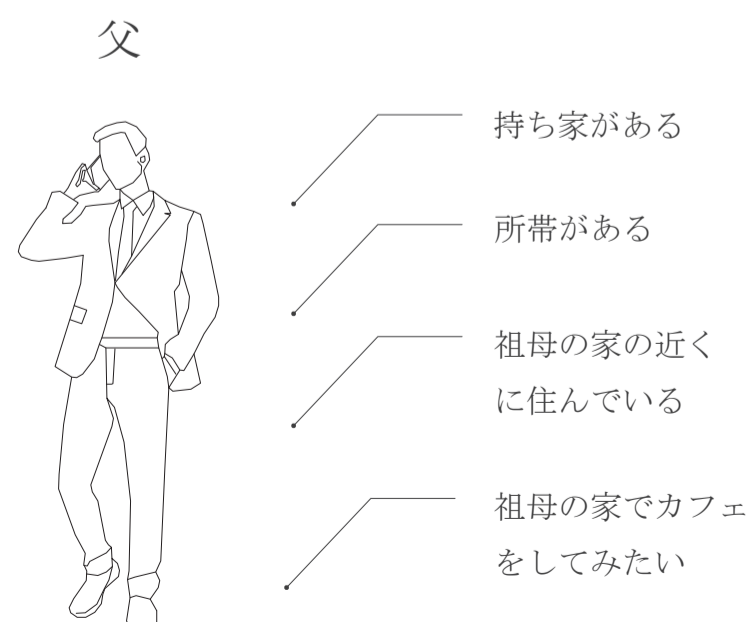
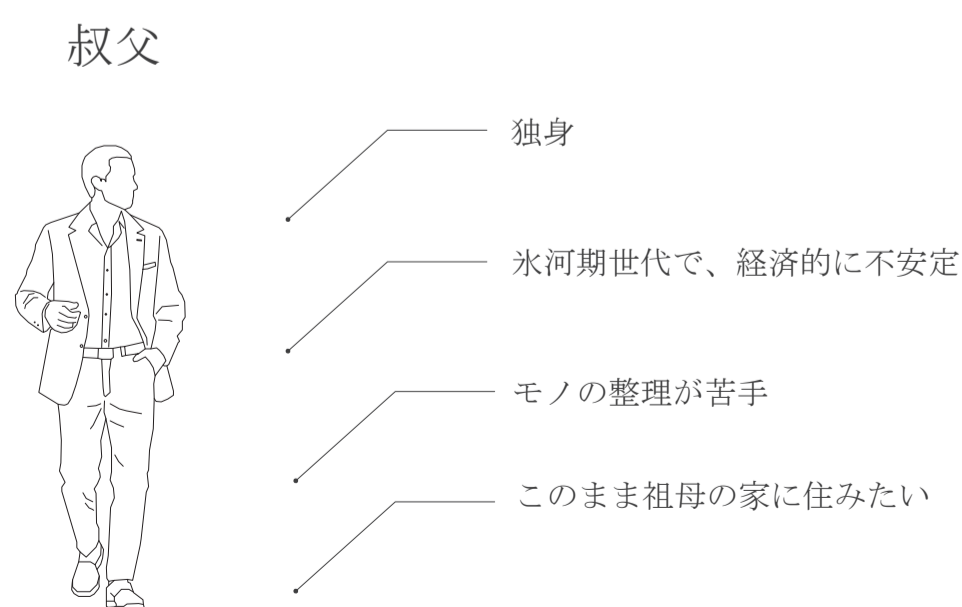
第一承継者である叔父は、現在も祖母と暮らしているが、単身での生活行為への不得手さや経済的不安を抱えている祖母の家は、単身の叔父が一人で維持・管理できるスケールを遥かに超えており、物理的・経済的な破綻が予見される

父：居住外の関与

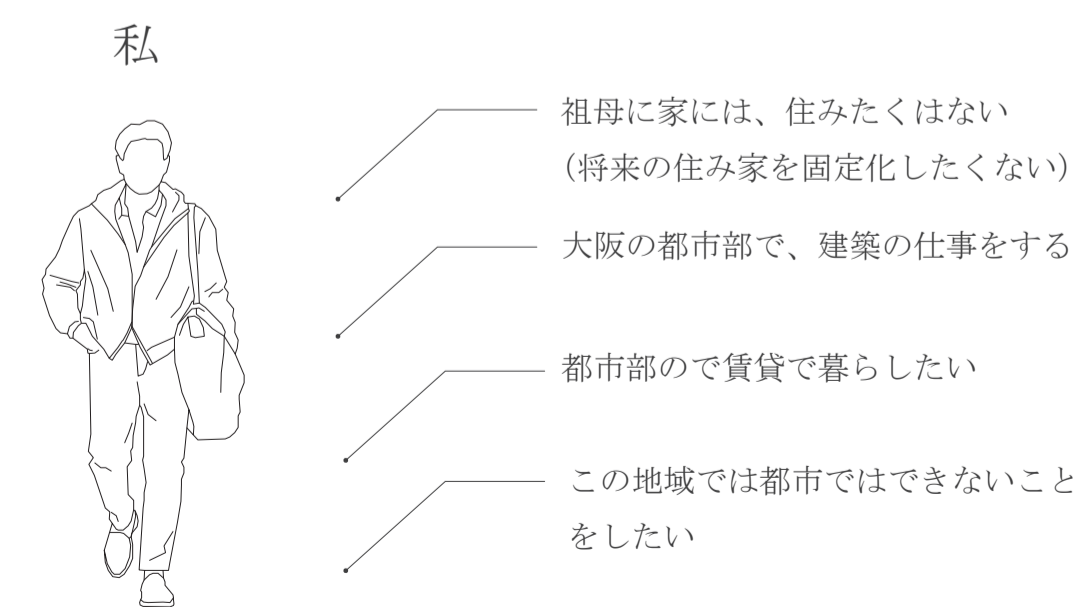
次男である父は、既に自らの持ち家と所帯を持っており生活の拠点をここへ移す選択肢はない
しかし、実家の存続を願い、将来的にはこの家の一部をカフェにするなど、住むこと以外での利活用を模索している。あくまで活動の場としての関わりであり、全面的な管理責任を負うことは難しい。

私：固定化の拒絶と往来の選択

定住による将来の確定化を断固として拒絶する一方、この地の自由さには惹かれている都市を拠点にここを遊びの拠点として往来する二拠点生活こそが私の選べる最大限の継承であると考えている



父の家（実家）と祖母の家の位置関係



02. 地域における家の継承の問題

2. 竹ノ内街道という地域性

改めて地域を見ると、地域においても、家の継承の仕方による街道的な風景への影響が感じられた。

2-1. 竹ノ内街道の概要

この竹内街道は、奈良盆地を東西に横切る横大路につながっており、藤原京に京が移されてからも、積極的に使われ遣隋使の小野妹子や外国の使節団もこの道を通っていた。また難波の港に着いた最新の文化や技術もこの道を通って飛鳥（シルクロードの終点地）へ運ばれ「外交の道」として栄えた。また聖徳太子信仰が盛んになるにつれて街道沿いにある聖徳太子御廟やそれを守る叡福寺が霊場となり「信仰の道」としてもにぎわいを見せていた。江戸時代には、お伊勢参り、大峰詣、當麻詣などが盛んになり「宗教の道」として、街道沿いには道標が建てられ、旅籠や茶店などが軒を連ねた。明治には、大阪南部が堺県となりやがて堺県が奈良県を併合すると物資を運ぶ「経済の道」として街道の重要性がましていった。そのため竹内峠では大改修が行われた。その記念碑が今も峠の旧道に残されている。時代とともに役割を変え姿を変えてきた竹内街道、そうしたうつろいのなかで、旧道沿いに残る道しるべや伊勢灯籠などが今もかつての街道のにぎわいを伝えている。



竹ノ内街道について



竹ノ内街道の空間

2-2. 変わりゆく風景と失われてゆく地域性

景観条例が近年に施行されたことにより建築行為の制限が行われ、具体的な色や素材に関する規定が決められているが、空間や形態における住宅と街道の関係性に対する内容が見受けられず、具体的な街道のイメージやビジョンが見受けられないため、住民の生活とあまり結びついていないと感じた。また、景観条例が施行されてはいるが、施行される以前から昭和住宅やハウスメーカー住宅の建て替えや、空き家や管理不全による解体や更地化によって、地域特有の住宅の街道のつながりが失われつつあり、街道としての魅力が失われつつある。



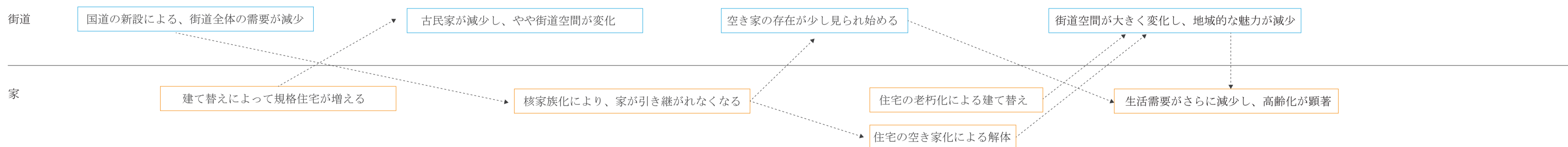
～ 2010 年



現在

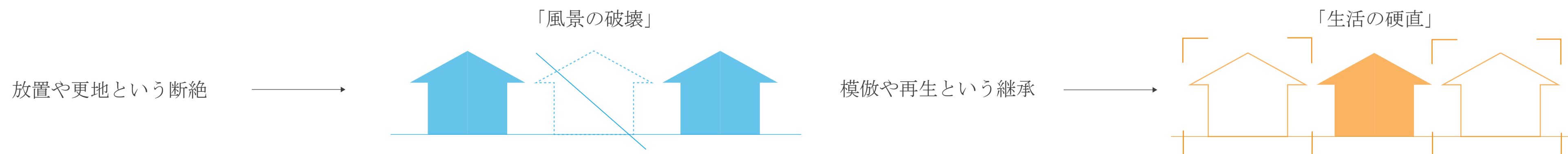
2-3. 祖母の家及び周辺の家現状と竹ノ内街道大道地区の現状から見える関係性

街道と家は密接につながっており、表裏一体の関係性を持っている。



2-4. 断絶と継承のジレンマ

家を継承し、不要だからといって更地にしてしまうと、街道という「全体性」の風景に欠落を生み、地域のアイデンティティの喪失に加担することになる。また放置してしまっても地域の環境に影響を与えてしまう。しかしながら、街道的な古民家の模倣や再生に終始するだけでは、現代を生きる住民の生活に「街道らしさ」というバイアスを無理に強いることになり、維持管理の重圧という新たな負担を生んでしまう。つまり、「風景の破壊」か「生活の硬直」かというジレンマが2つの背景の中で生まれている。



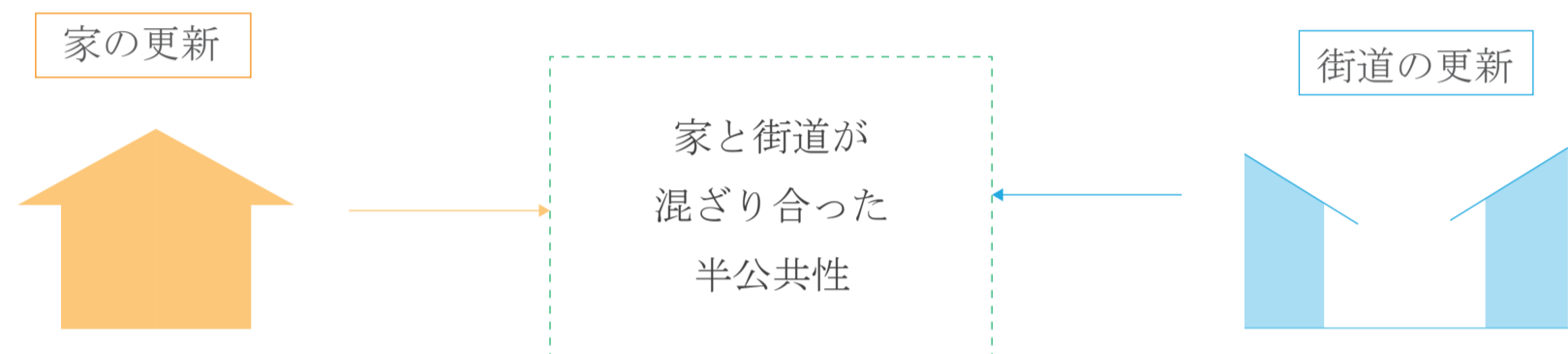
3. これからの街道と家の更新の在り方を示す「風景のみちしるべ」

本来、街道の風景は沿道の家の生活や営みと結びつくことで形成されてきたものである。したがって、街道の風景を考えるうえでは、家の更新を単なる個別の建て替えとしてではなく、継承という構造の中でどのように更新されていくのかを捉え直す必要がある。そこで本提案では、家の継承構造を前提とした段階的な更新を行いながら、家と街道の関係をゆるやかに結び直していくを試みる。これにより、住宅の更新と街道の風景の更新を並行的に進め、家と街道が混ざり合う半公共的な場の形成を目指す。

祖母の家を起点に、街道と家のこれからの更新の在り方を示す“道しるべ”をつくる試みである。

3-1. 街道と家の並行的な更新

家の改修を通じて、家（ハード）及び街道（ソフト）の更新を並行的に行い、家と街道が限りなく混ざり合った半公共的な場を目指す。



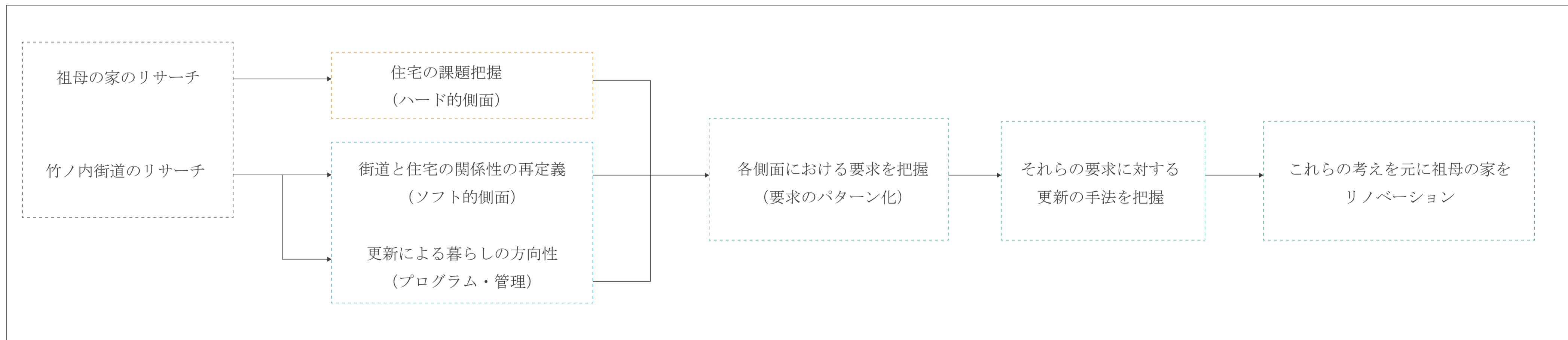
3-2. 時間軸のある更新プロセス

建築を一度で完成させる固定的な存在として扱うのではなく、継承の流れによって段階的に更新されるプロセスとし、家族と家、街道と家をゆるやかに結びつける。



3-1. 設計フロー（祖母の家と街道と家の関係性のについての把握）

祖母の家については、家の履歴や現状の使われ方を把握し、具体的にどのような改修が必要かを把握し、竹ノ内街道のリサーチについては、街道と住宅の関係性を抽象的に把握する。また、竹ノ内街道のリサーチや地域に住む家族へのヒアリングから地域における生活や暮らしの現状や特性を把握し、更新による暮らしの方向性を把握した。



設計フロー

04. 祖母の家のリサーチ

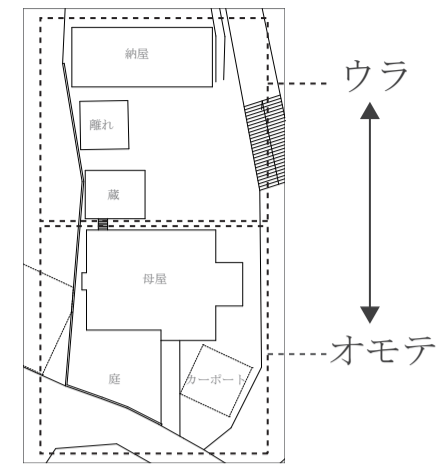
4-1. 祖母の家の変遷

4-1-1. 足し算の暮らし

祖母の家の変遷を辿ると、建て替え前は農家住宅であり、大家族による暮らしの影響で、離れや納屋など土地を増築していくような暮らしが見受けられた。その後は、核家族化による影響で家族が縮小し、離れや納屋は、予備倉庫としている。また、1980年代からは、カーポートやキッチンなどの暮らしの変化に伴った増築及び改築が見受けられた。

4-1-2. オモテとウラ

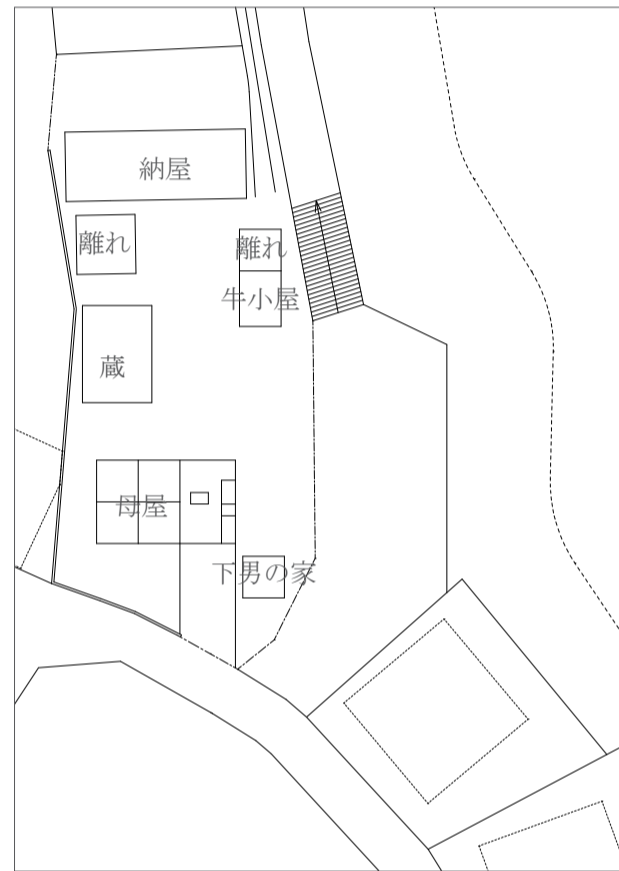
この地域の敷地には、オモテとウラがあり土地に明確な区別があった。また、家の履歴を辿ると建て替え前は伝統的な農家住宅であり土間によってそのオモテとウラがつながっていたが、建て替えと共にそのつながりが失われていた



4-1-3. 土間の存在

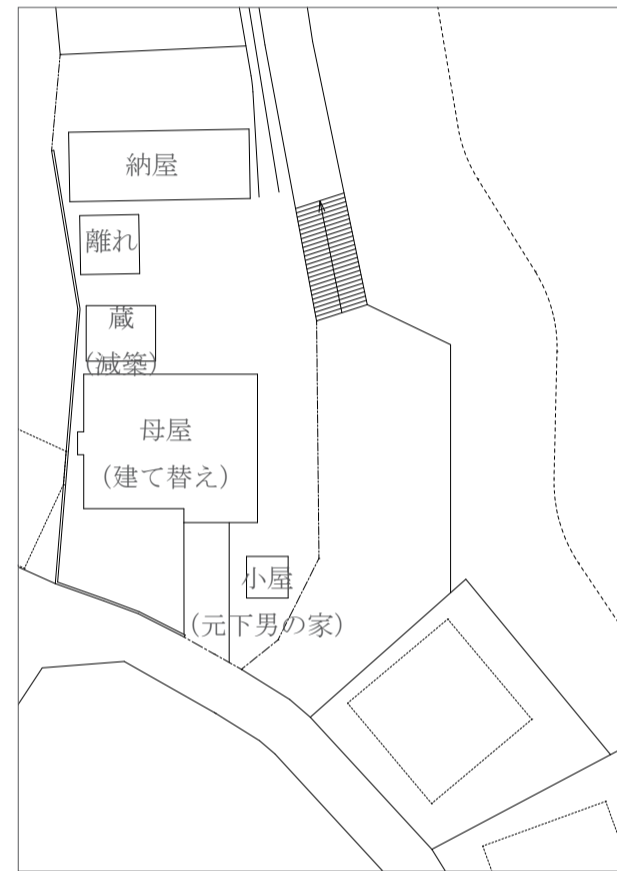
建て替え前の農家住宅においては、土間の空間が存在し、中間領域的な空間の割合が、建て替え後に比べて多いと感じた。また、土間の空間は、竈や流しがあり、農業場や台所など暮らしや生活を拡張する場として多目的に利用されていた。周辺の現存する古民家においても、このような傾向があった。

～1960年代



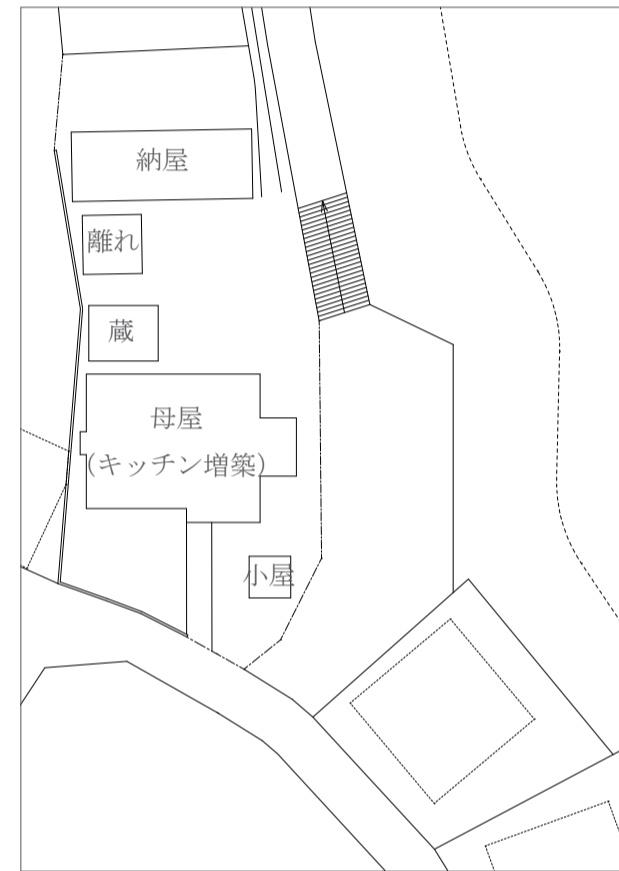
家族構成（年齢順）
 高祖母
 高祖父 高祖母B 養子 祖母
 高祖母A 高祖母C 曾祖父 曾祖母A
 高祖母D 曾祖母 曾祖母B
 下男

1960～1980年代



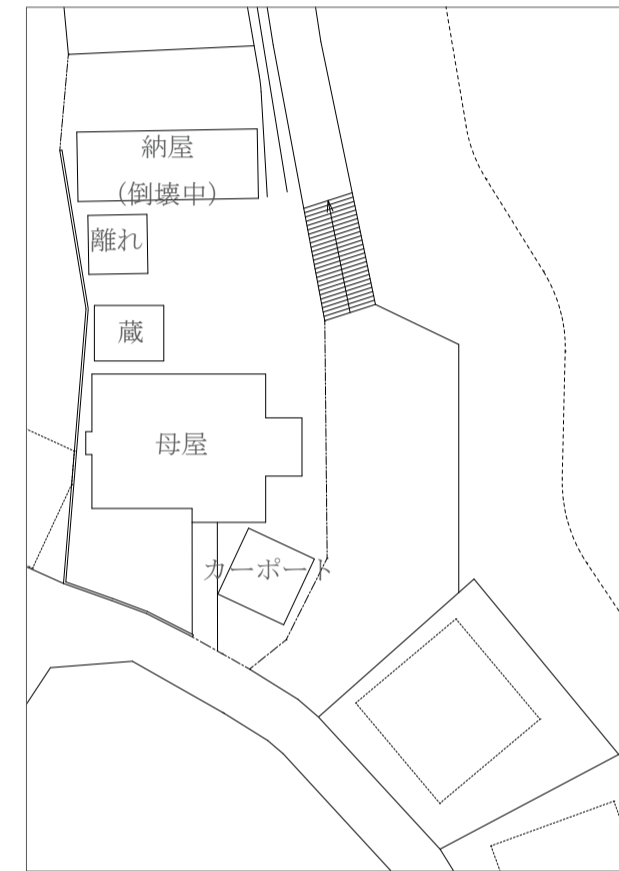
家族構成（年齢順）
 曾祖父 祖父
 曾祖母 叔父
 祖母 父

1980～1990年代



家族構成（年齢順）
 曾祖父 叔父
 祖母 父
 祖父

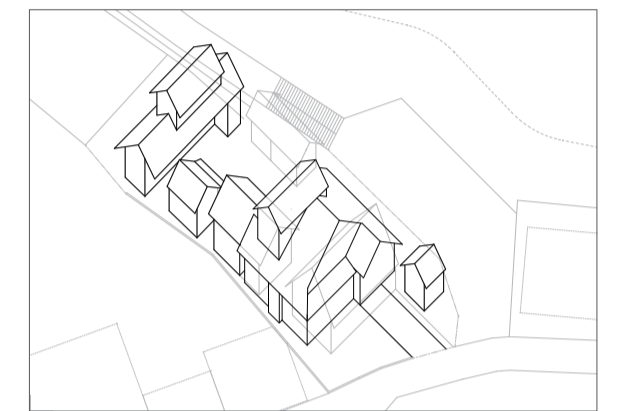
1990～現在



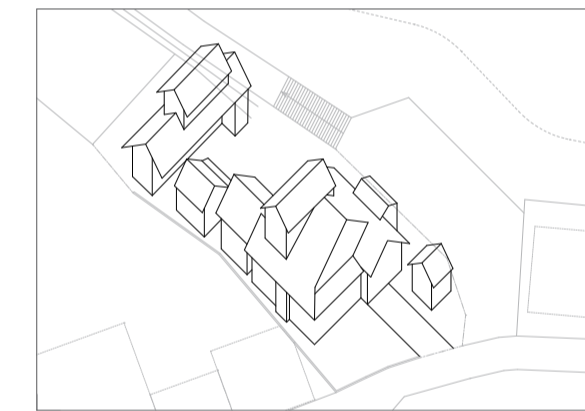
家族構成（年齢順）
 祖母
 叔父



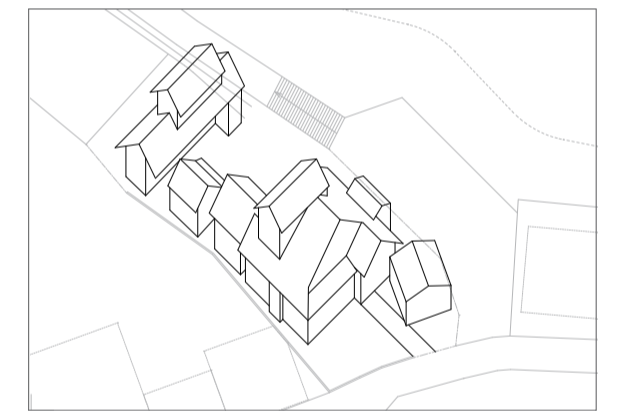
-1960
(建て替え前)



1960-1980



1980-1990



1990-2025

4-2. 祖母の家における家の使われ方

4-2-1. 部屋の物置化

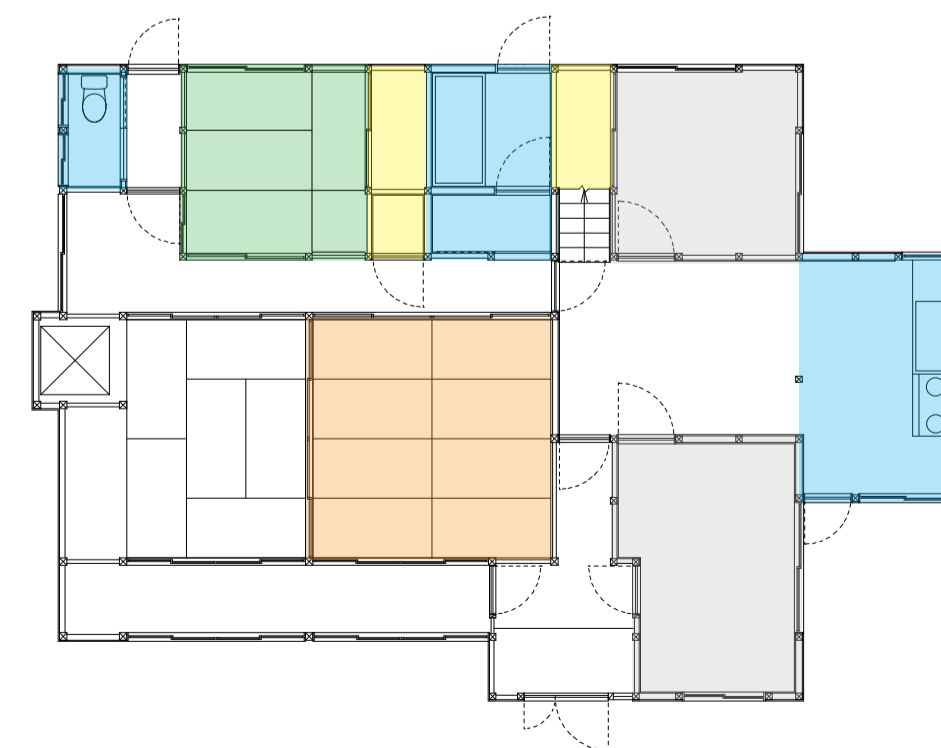
家族の縮小や暮らしの変化に伴う、部屋の物置化が顕著であった。また、物置化する部屋の条件として、

1. ドアを閉じると完全に閉じた空間になる
2. 採光通風条件が悪い（窓が小さい、開放的でない）
3. 床面積が小さい（4.5畳程度）

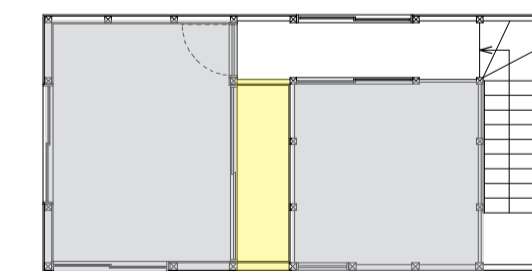
が挙げられ、空間的な要因と環境的な要因によって、部屋の住居としての優先度がかなり下がってしまっていることがわかる。

4-2-2. 家に可変的な柔軟性がない

実際の部屋の使われ方からもわかるように家族構成及び暮らしのなかで、生活空間として日常的に利用されている空間が最小化されている。それにより、色のない部屋や物置化した部屋の割合が極端に多い。したがって暮らしの変化に家が柔軟に対応できていないことがわかった。



母屋 1階平面図



母屋 2階平面図

- 収納スペース
- 水回り
- 物置化した部屋
- 叔父の部屋
- 祖母の部屋

4-1. 街道空間に影響を与える住宅の要素抽出

竹ノ内街道についてのリサーチについては、街道に影響を与える住宅の要素を把握することとした。現状のリサーチでは、住宅が建て替わってしまっているところも多く街道と住宅の関係性を把握するには困難であったため google map における過去のストリートビューを見る機能も併用しつつ要素を抽出した。



①



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

4-2. 街道全体の暮らしについて

街道全体としての暮らしの傾向についても、街道に長年暮らしている父、祖母、叔父にヒアリングなどにより把握し、リノベーションによる暮らしの方向性を探った。

4-2-1. 2世帯近居の住民

父と同じように、太子町内及び大道地区周辺に住居を構え、何かあったときには駆け付けれるように持ち家を持ちつつも、近居を選択している世帯が比較的多いことが祖母や父のヒアリングによりわかった。

4-2-3. DIYの行いやすい環境

地域の産業の多くが農業であることから、ホームセンターなどが周辺に多くあり、工具や資材を調達しやすい環境にある。そのため、無理なくかつ円滑にDIYを行うことができる。

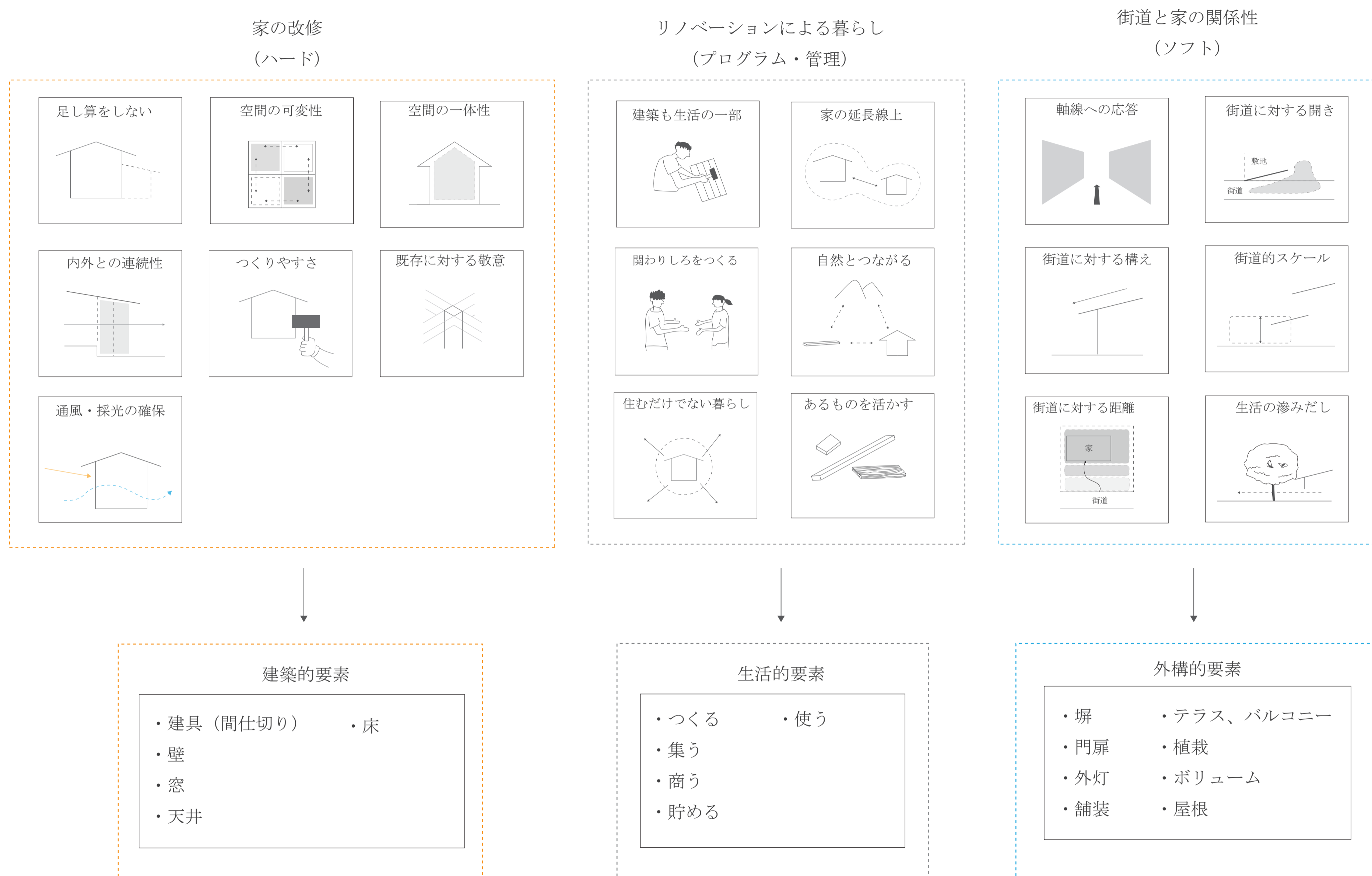
4-2-2. 農業と家の関係性

現存する民家や街道に見られる素材は、地域の主要な産業である稲作や畑作などから取れる素材である。現在においても、田畑や山があり家と農業には強い結び付きが感じられる。

4-2-4. 暮らしの停滞感

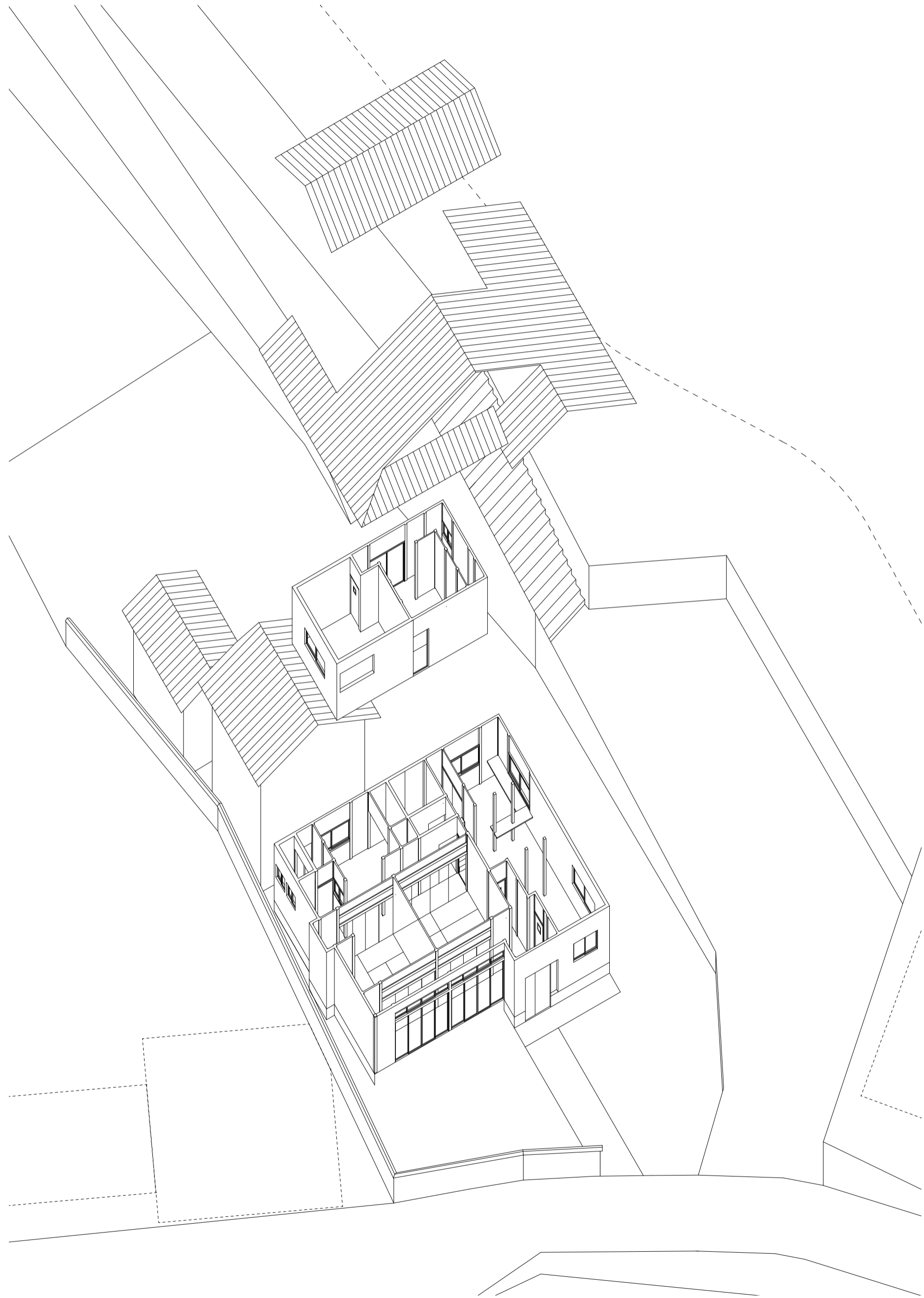
地域内では、移動販売車が来るなどしており、高齢化による買い物弱者が多い。また、暮らしにおいても1日中家にいることも少なく街道において人気がない。したがって、暮らしの停滞化し、地域コミュニティが弱体化している。

リサーチから得られた結果をもとに、家の改修（ハード）・リノベーションによる暮らし方（プログラム・管理）・街道と家の関係性（ソフト）について必要であると考えた要求をまとめる

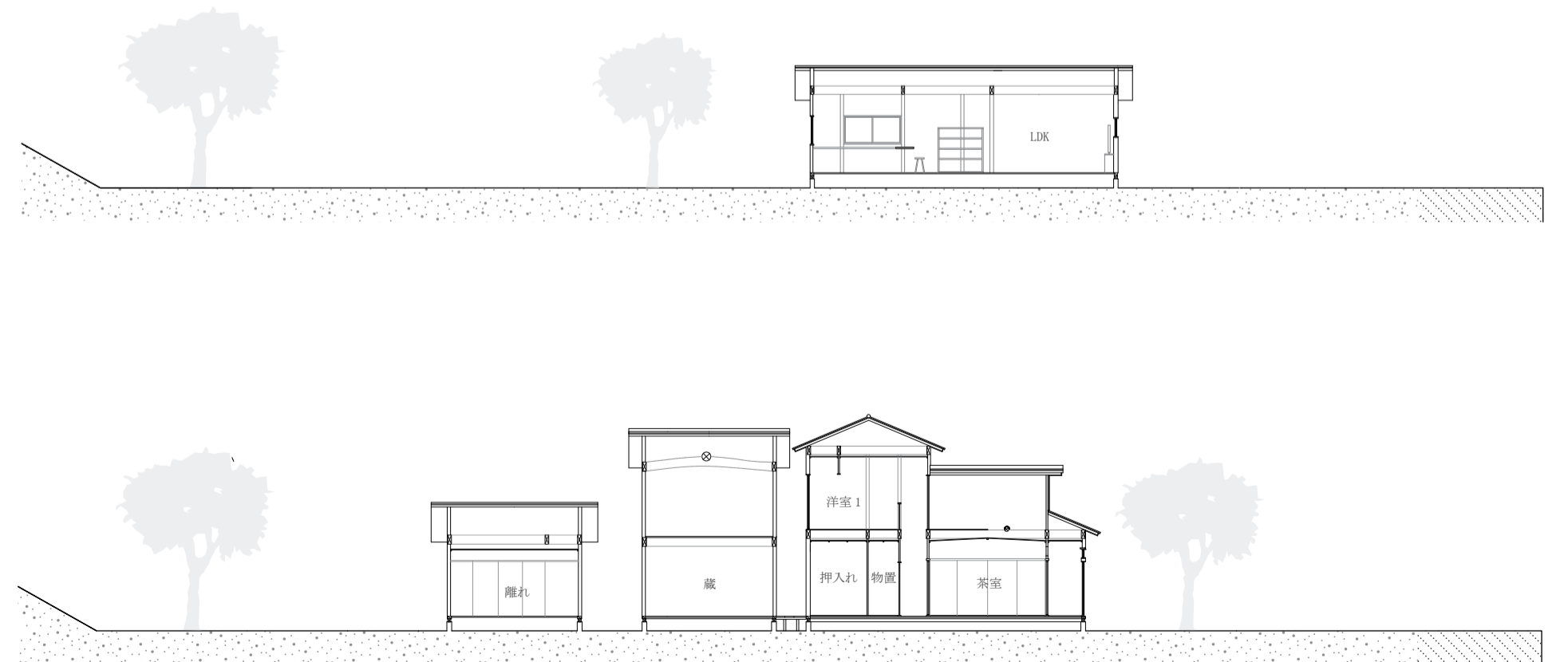


得られた各要求から、それぞれの部分が建築的要素と外構的な要素と素材的要素の3つと生活的要素に大きく分けられることが、より明確になった。

そして、得られた要求と要素をもとに設計を行うこととした。

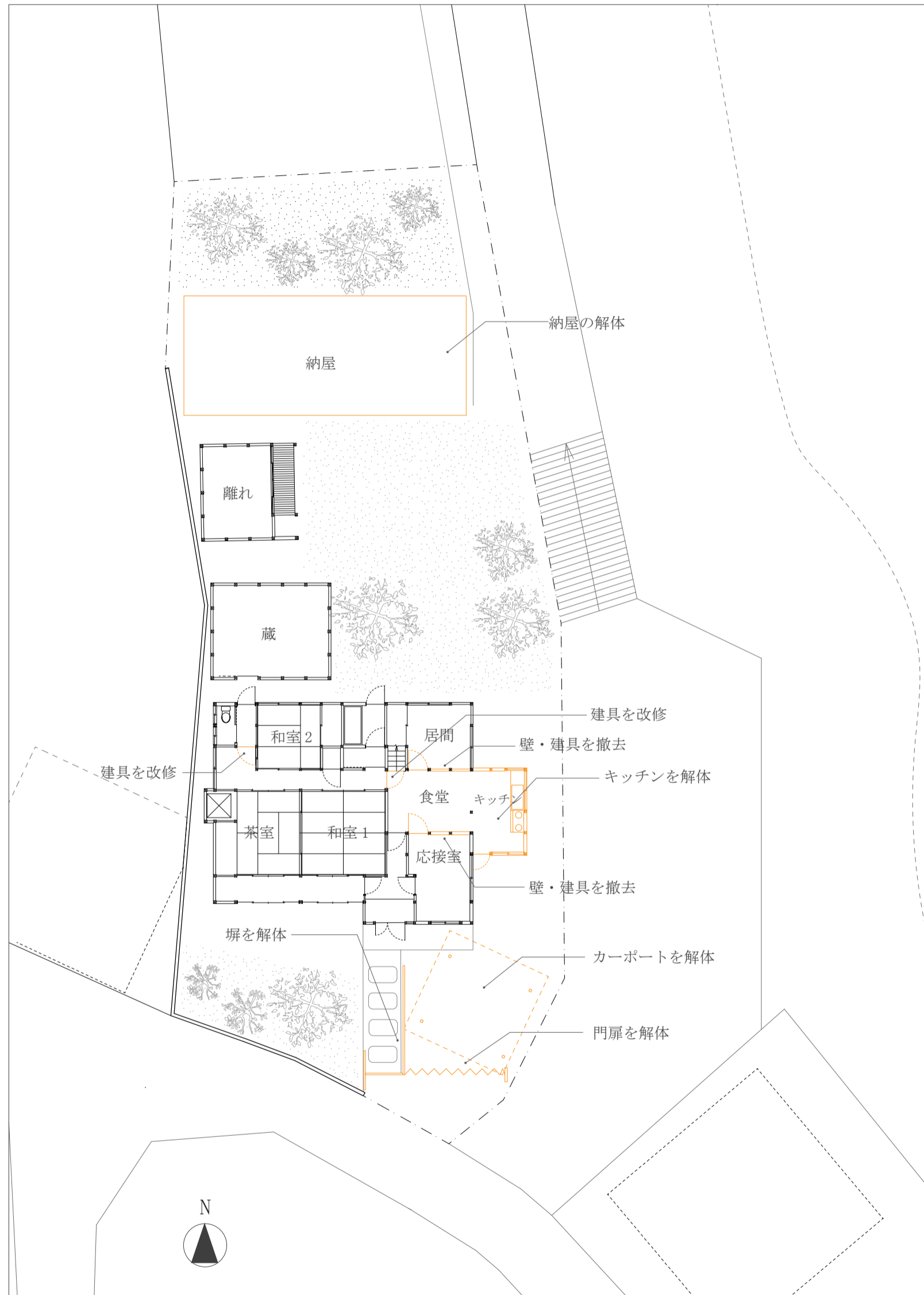


第一段階 「整える」 (叔父)



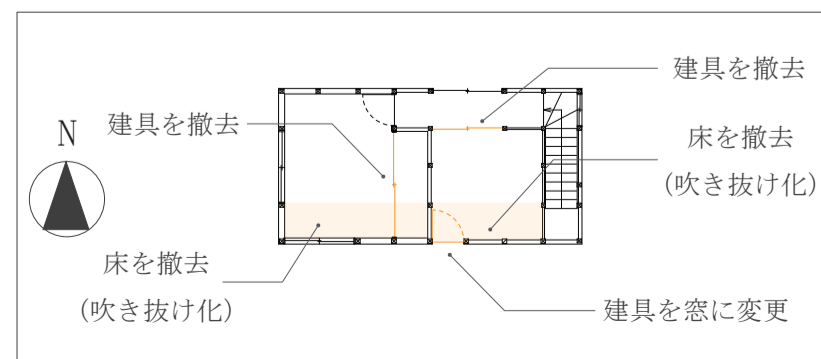
6-1. 第一段階 「整える」(叔父)

叔父の生活圏を整備し、次の更新への余白をつくる。個人の管理負担を減らす整理が、街道の「景観の輪郭修復」へと同期する。



改修前配置図兼1階平面図

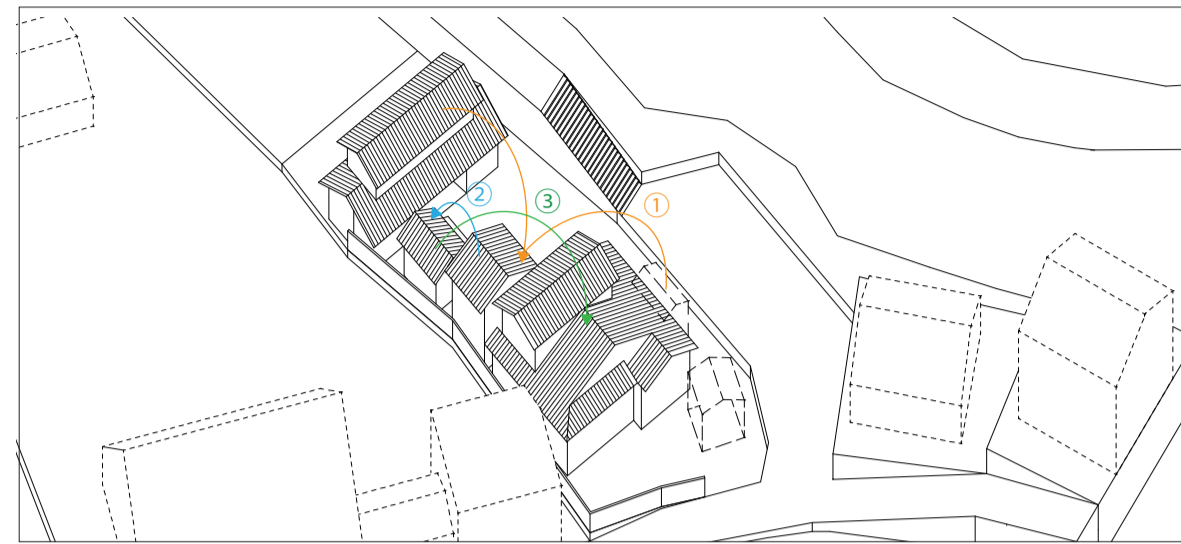
— 既存部
— 改修部



改修前2階平面図

6-1-1. 解体材のストック活用及び改修の行う環境を整える

危険家屋や不必要な増築部及び外構を解体する。また、解体した材料は改修の材料とする。

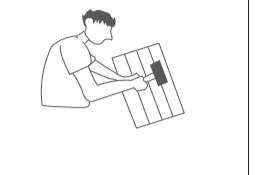


①納屋・キッチン・カーポートを解体し、蔵へストック

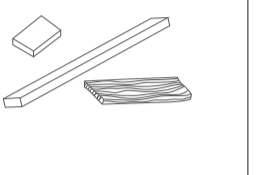
②離れを作業場とし、解体材をDIYで加工

③加工した解体材を用いて、祖母の家を改修

建築も生活の一部

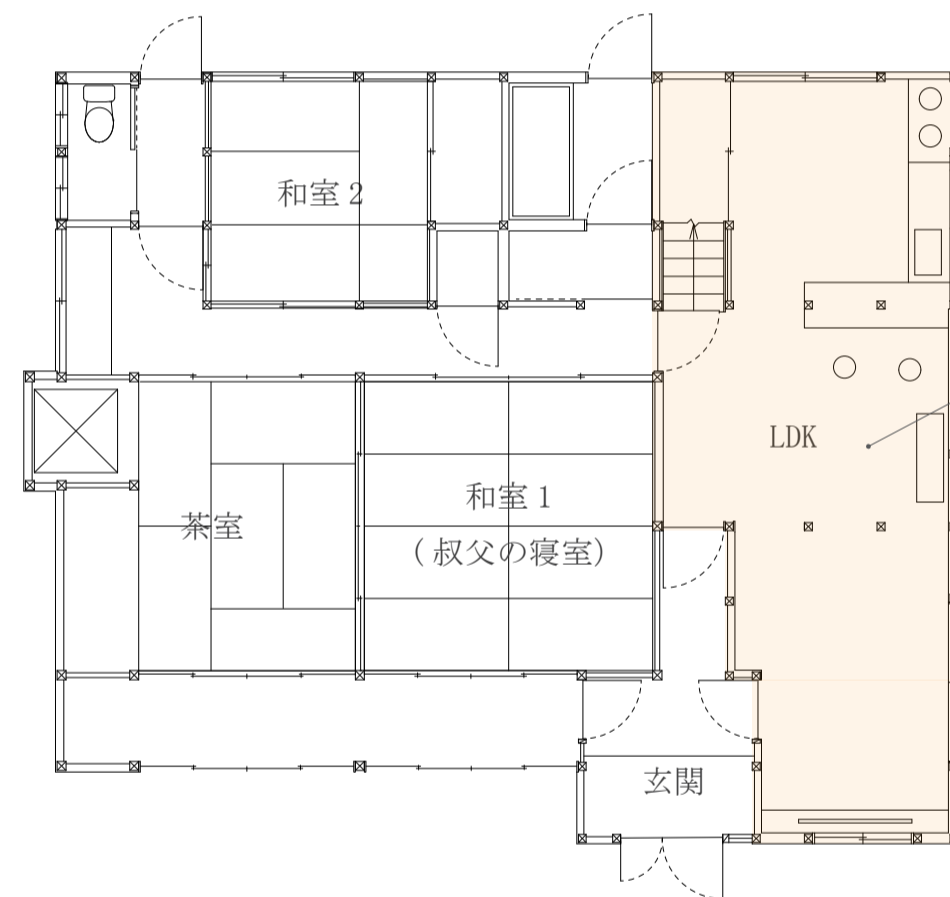


あるものを活かす

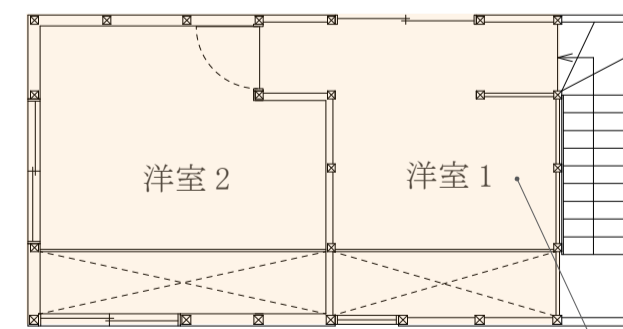


6-1-2. 単身者としての叔父の住環境を整える

生活に影響を与えないようにするため、DIYでできる範囲の小さな作業とし、住みながら居住環境を更新していく。



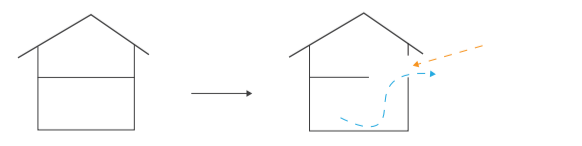
改修後1階平面図



改修後2階平面図

床の操作

2階を環境装置へとする



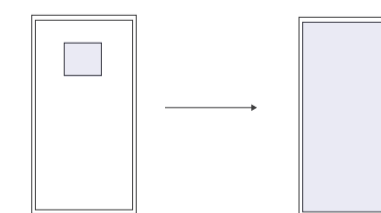
吹き抜けを設け、2階部分の窓・気積による1階の通風採光を図り、環境装置とする。

キッチンには次の継承者である父のカフェに対する整備でもある。

物置化していた部屋をLDK化し一体空間としてまとめる

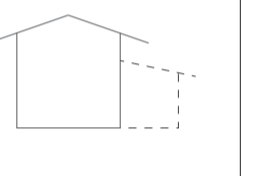
建具の操作

建具の透過性を上げる

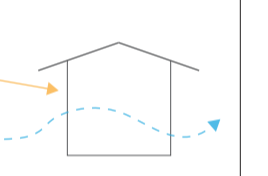


建具の改修については、ガラス戸などの透過性のある材料を用いた建具へと変更する。建具に用いる材料は解体材のストックを活用する。これにより、部屋の空間的な一体性と可変性を確保する。

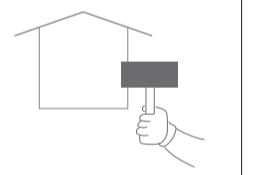
足し算をしない



通風・採光の確保



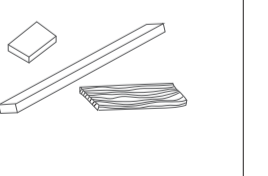
つくりやすさ

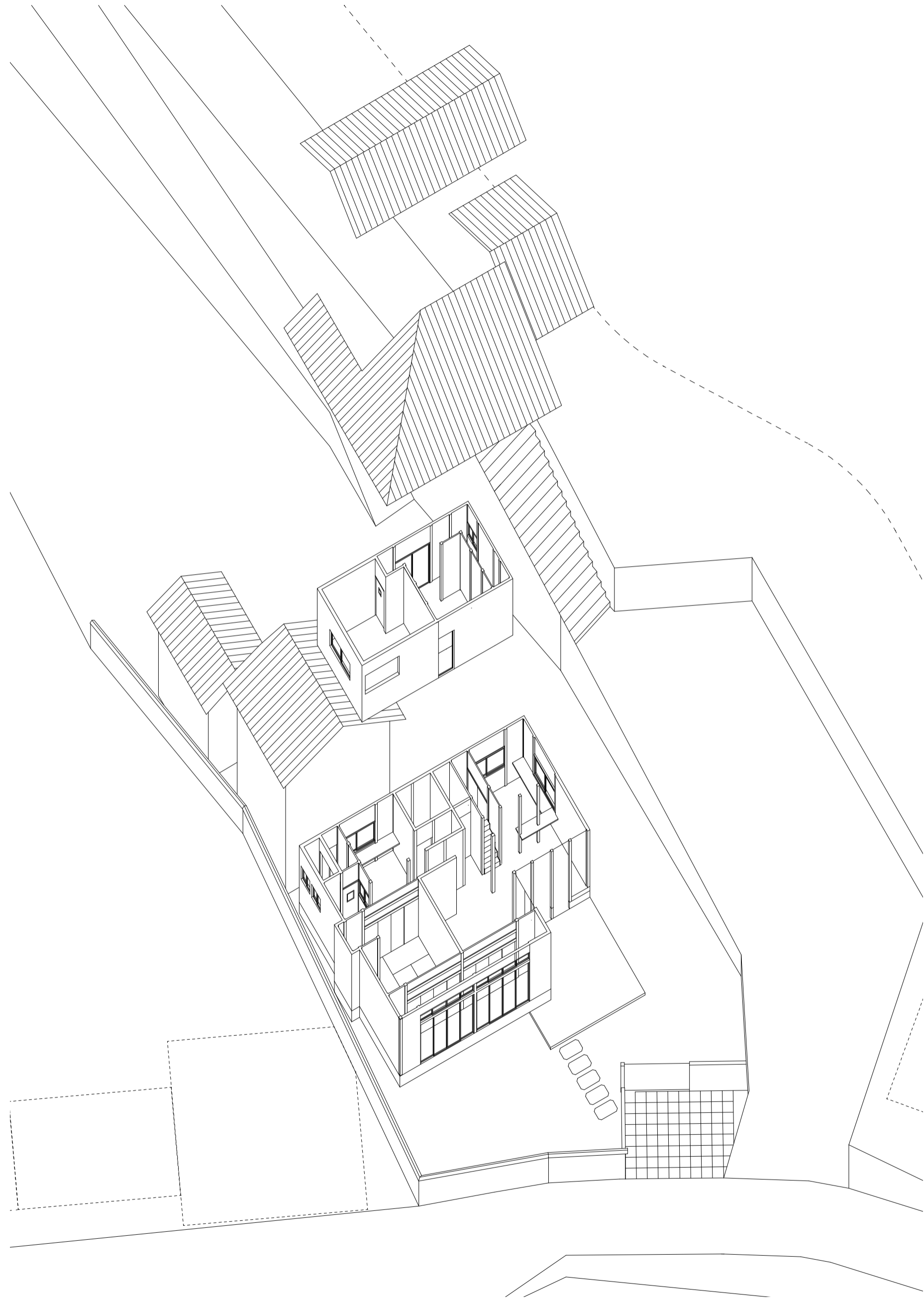


空間の一体性

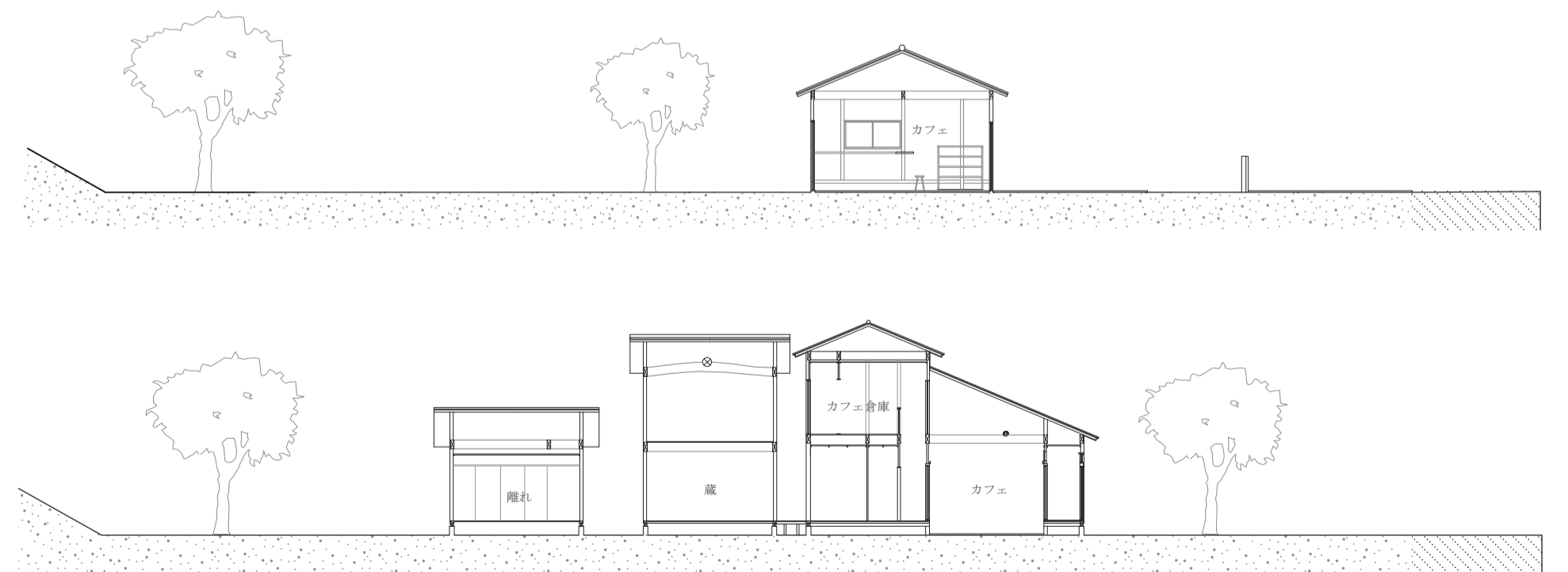


あるものを活かす



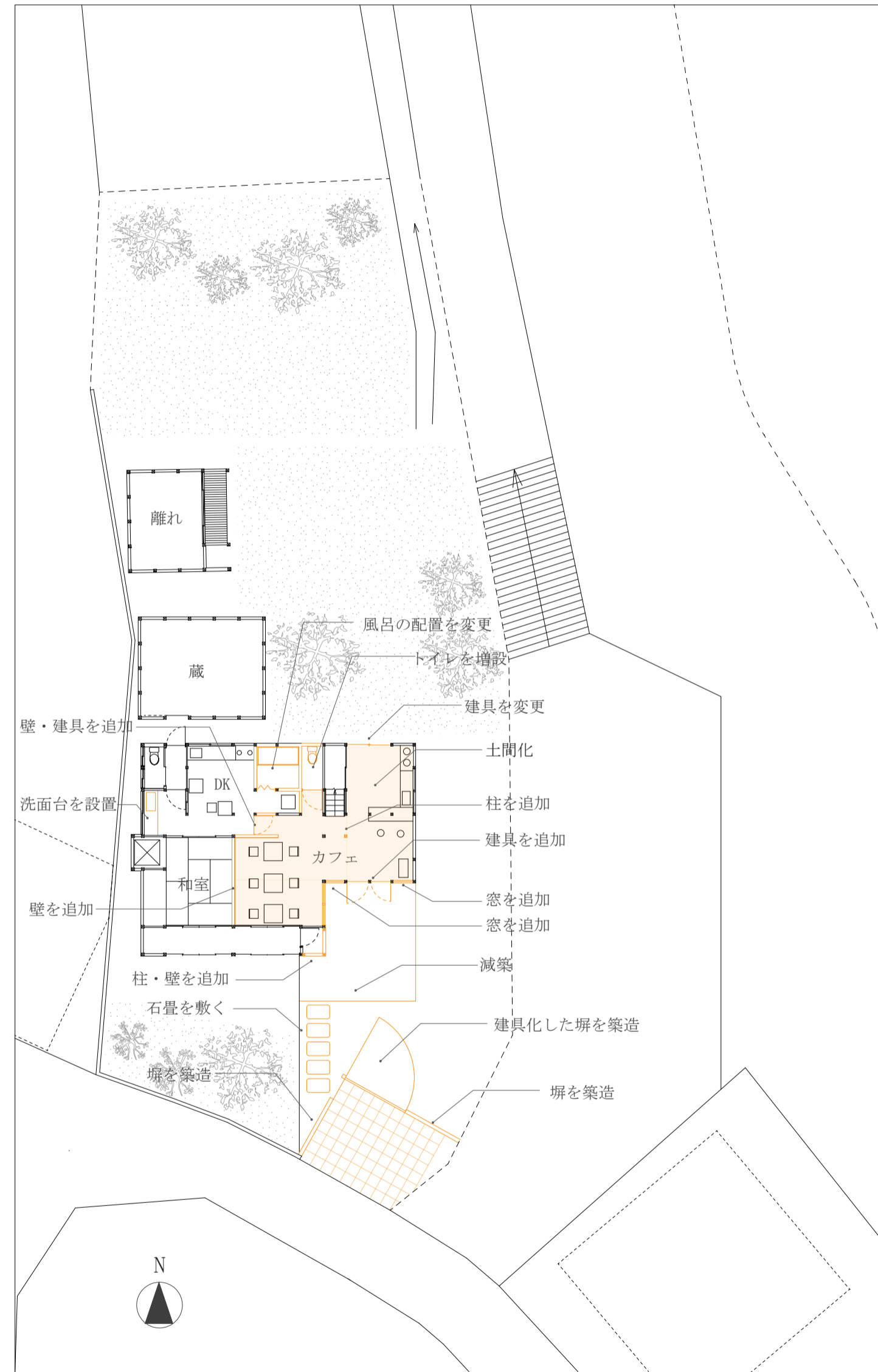


第二段階 「開く」 (父)



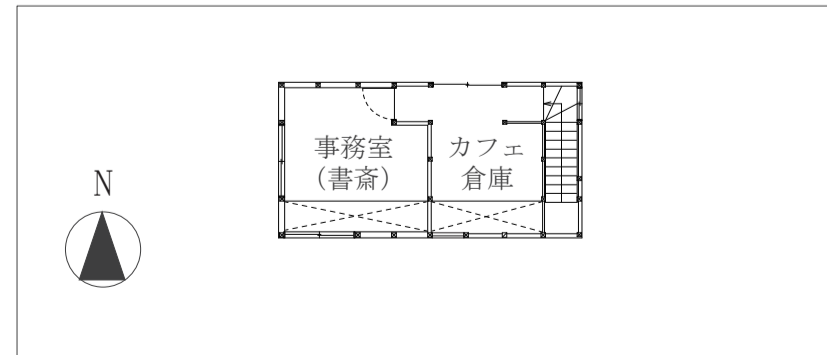
6-2. 第二段階 「開く」 (父)

家の一部を減築し、父がカフェ等の「活動」を展開できる器を作る。私有地を活動の場として街道へ差し出す操作が、道に「滞留の余白」を贈与する。



改修後(第二段階)配置図兼1階平面図

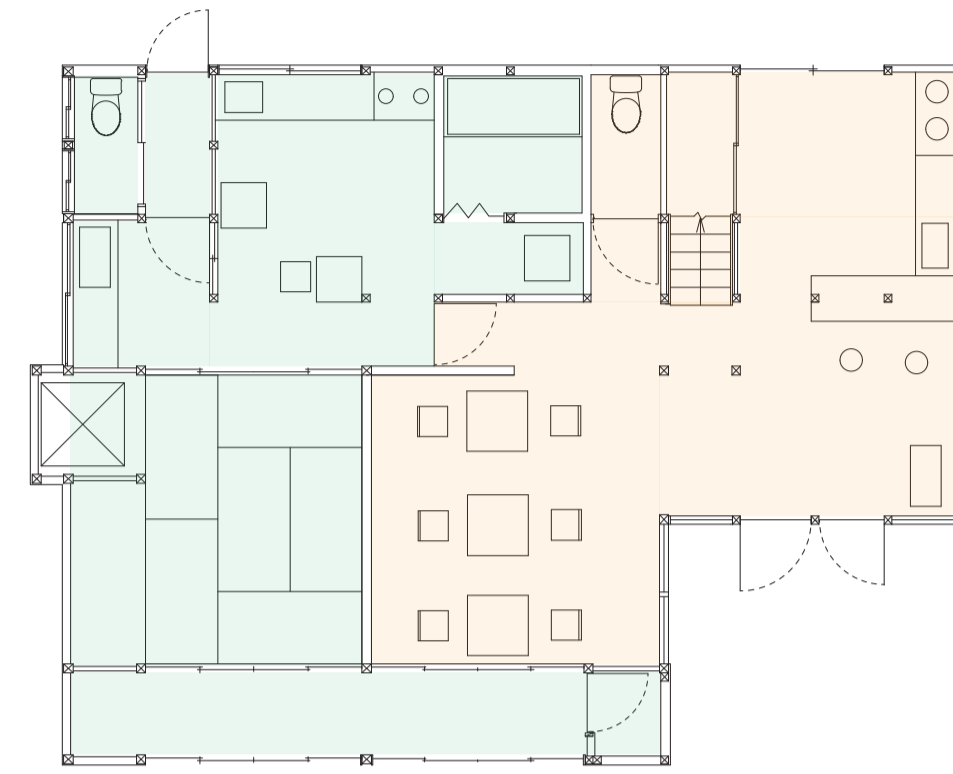
— 既存部
— 改修部



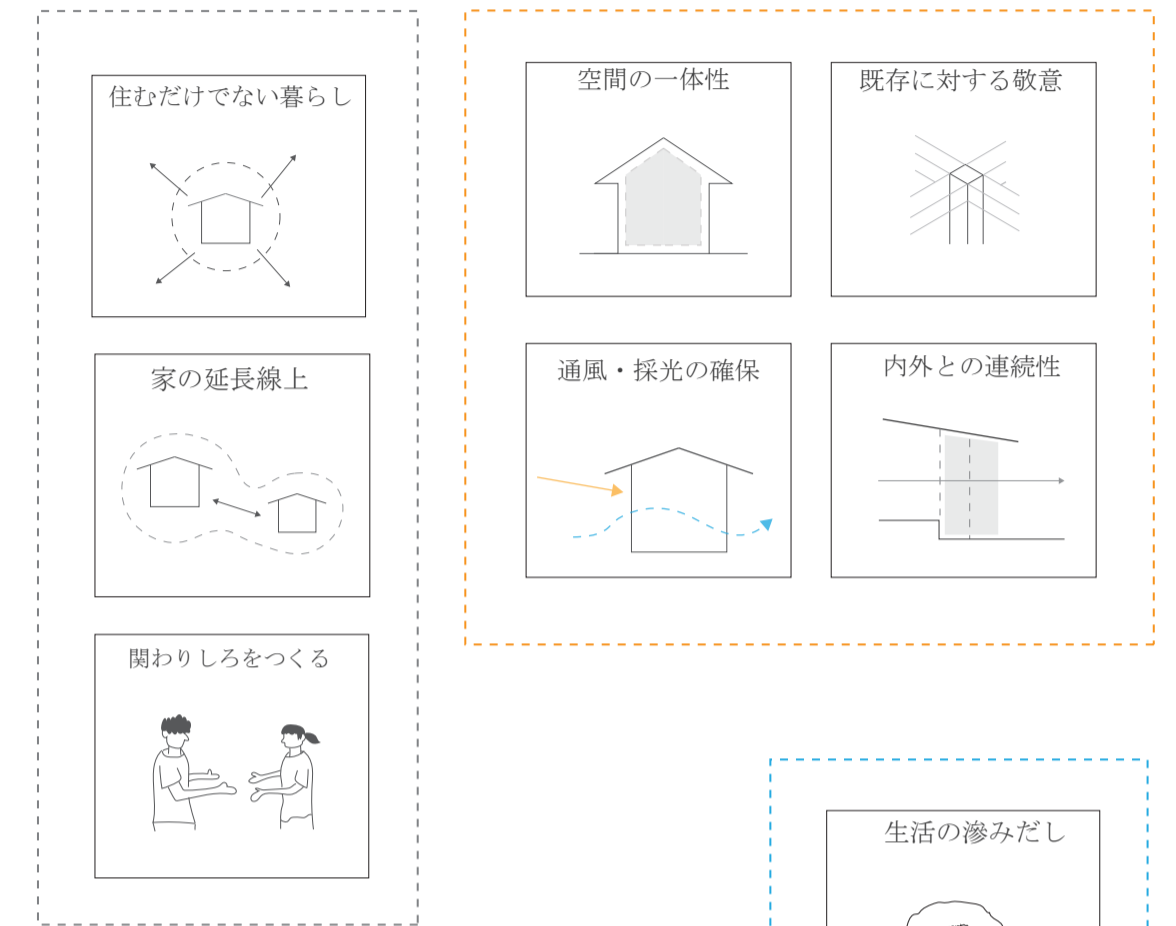
改修後(第二段階)2階平面図

6-2-1. カフェで開く

以前は、物置部屋と化していた余剰部であった部屋を父が構想するカフェへと改修する。叔父の生活との共存も配慮しながらカフェ部分と住宅部分を切り分ける。一部を減築し、叔父の部屋とカフェの大きさの最適化を行った。減築部は光庭とすることで、カフェ空間の開放性を与える。



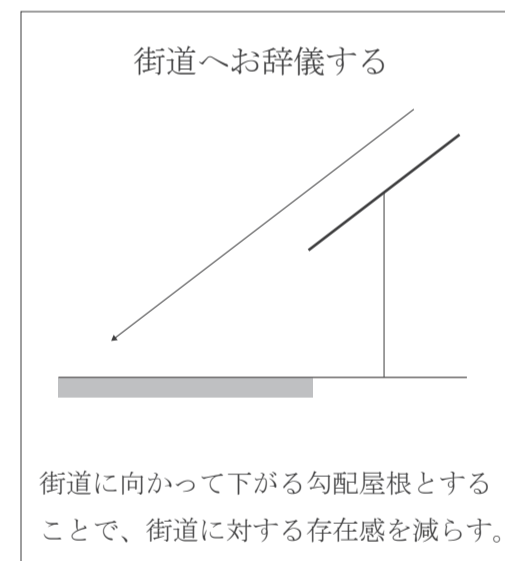
■ 住居部分
■ カフェ部分



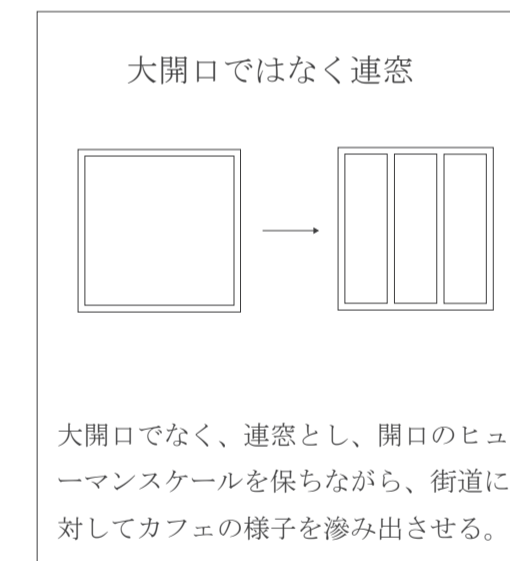
6-2-2. ファサードで開く

カフェへの改修と同時にファサードの改修を行い、街道の空間性に貢献し、街道に開く。

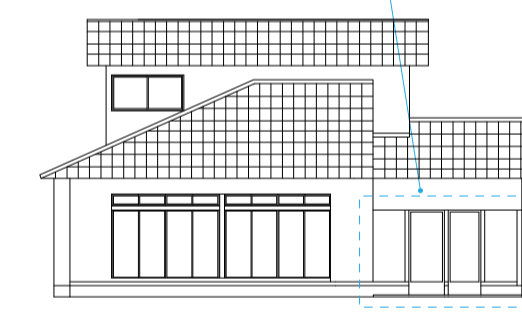
屋根の操作



開口部の操作

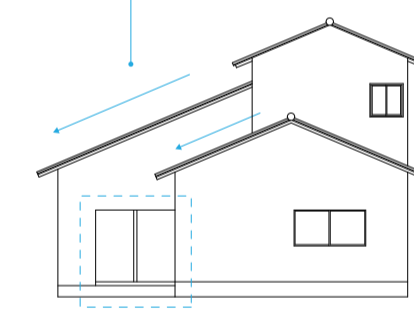


壁面の開口率を上げ
カフェの雰囲気を滲みだす

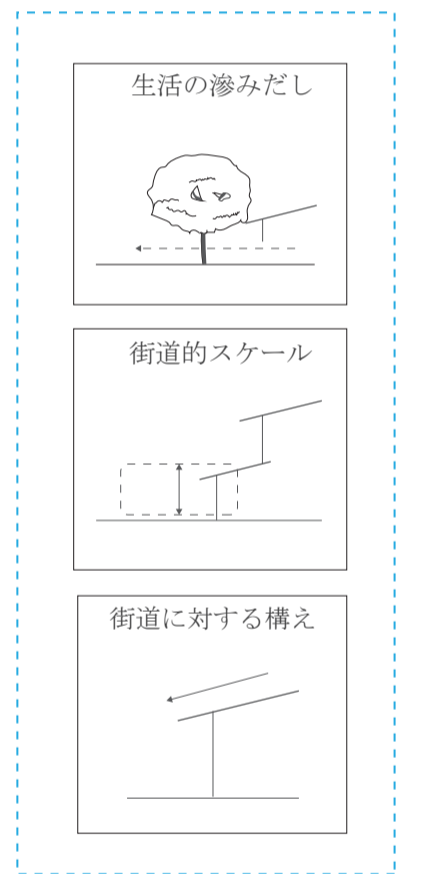


改修後(第二段階)南立面図

納屋の瓦を再利用する



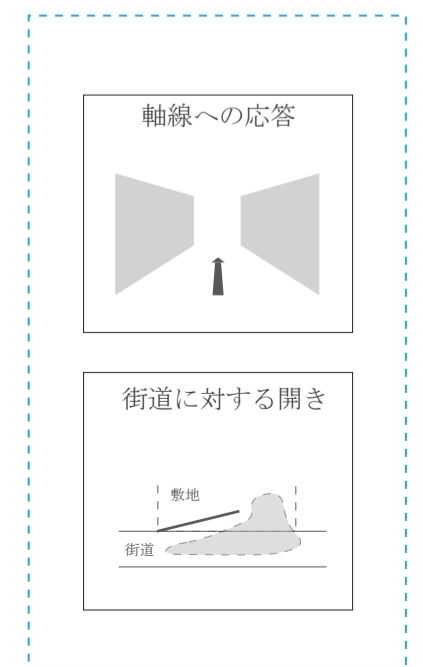
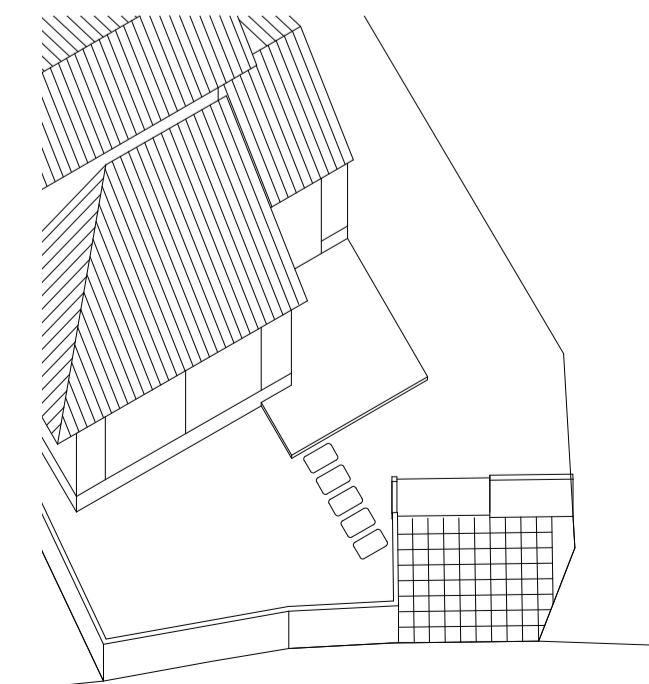
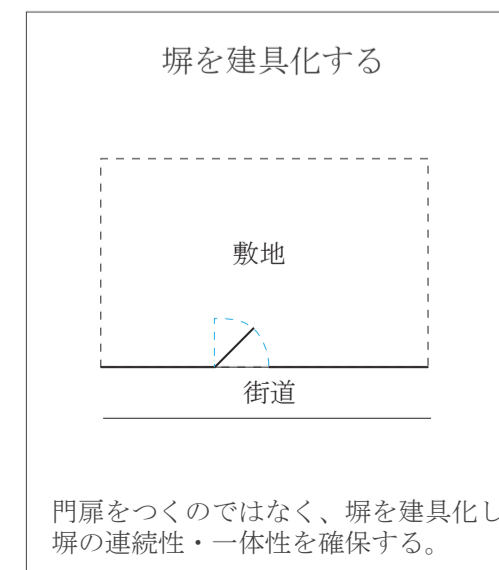
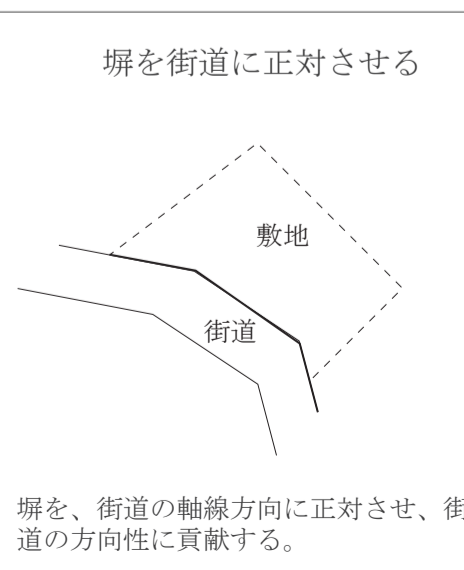
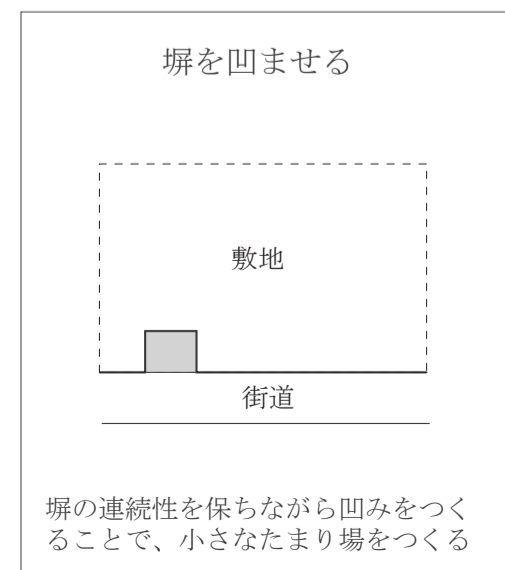
改修後(第二段階)東立面図

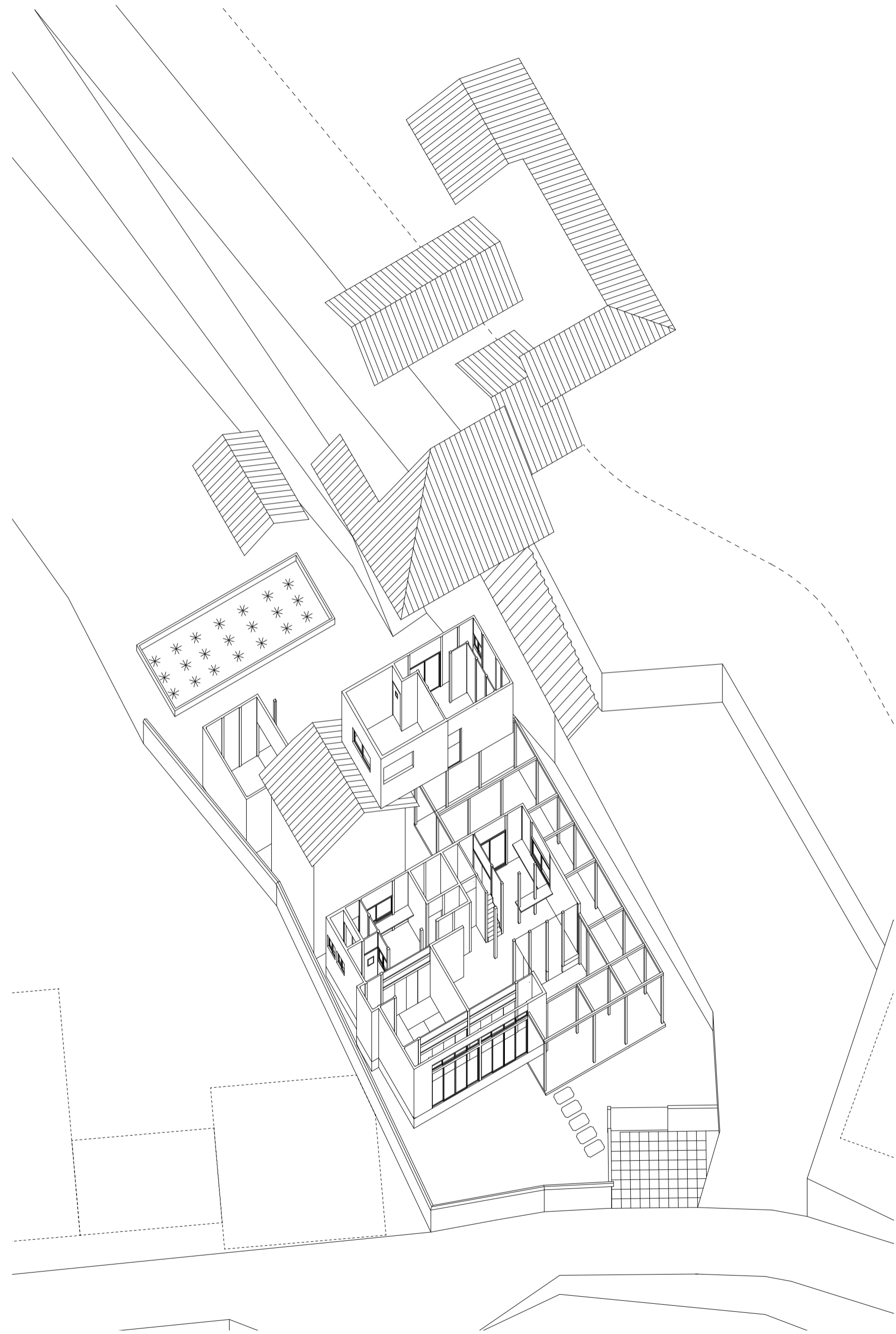


6-2-3. アプローチで開く

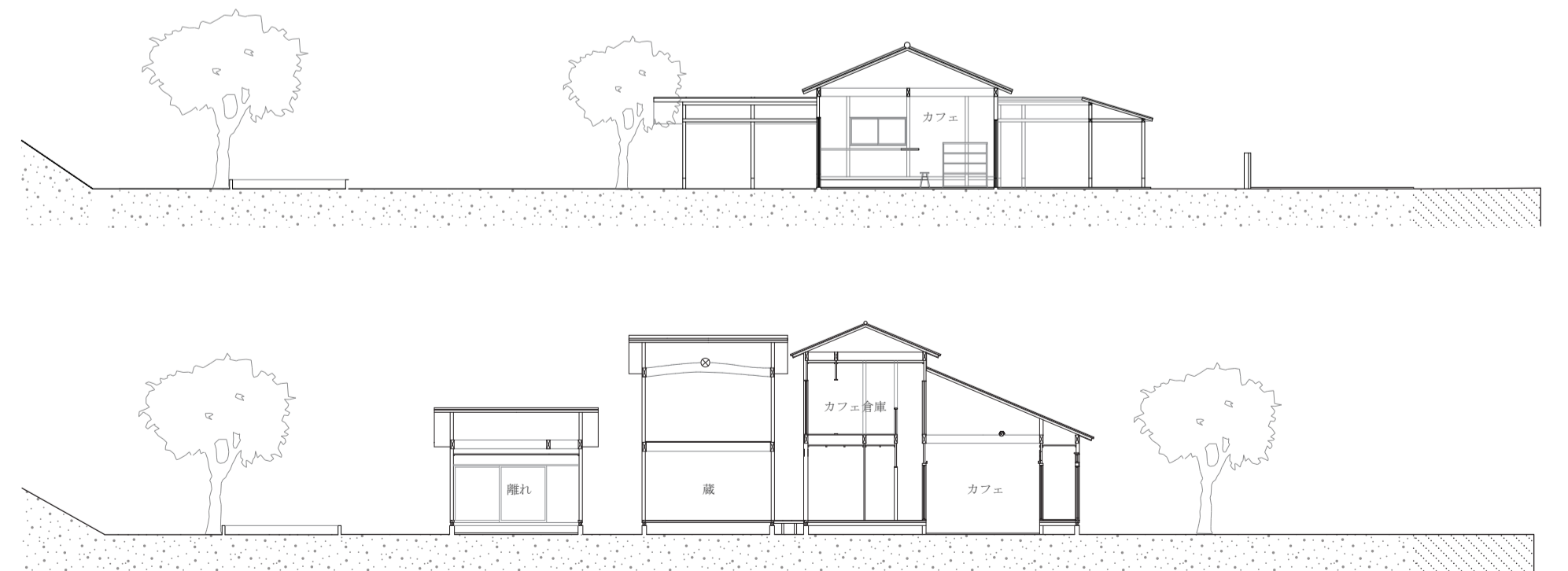
叔父の段階において、解体し、整備されたアプローチを改修し、街道と接続する。

塀の操作



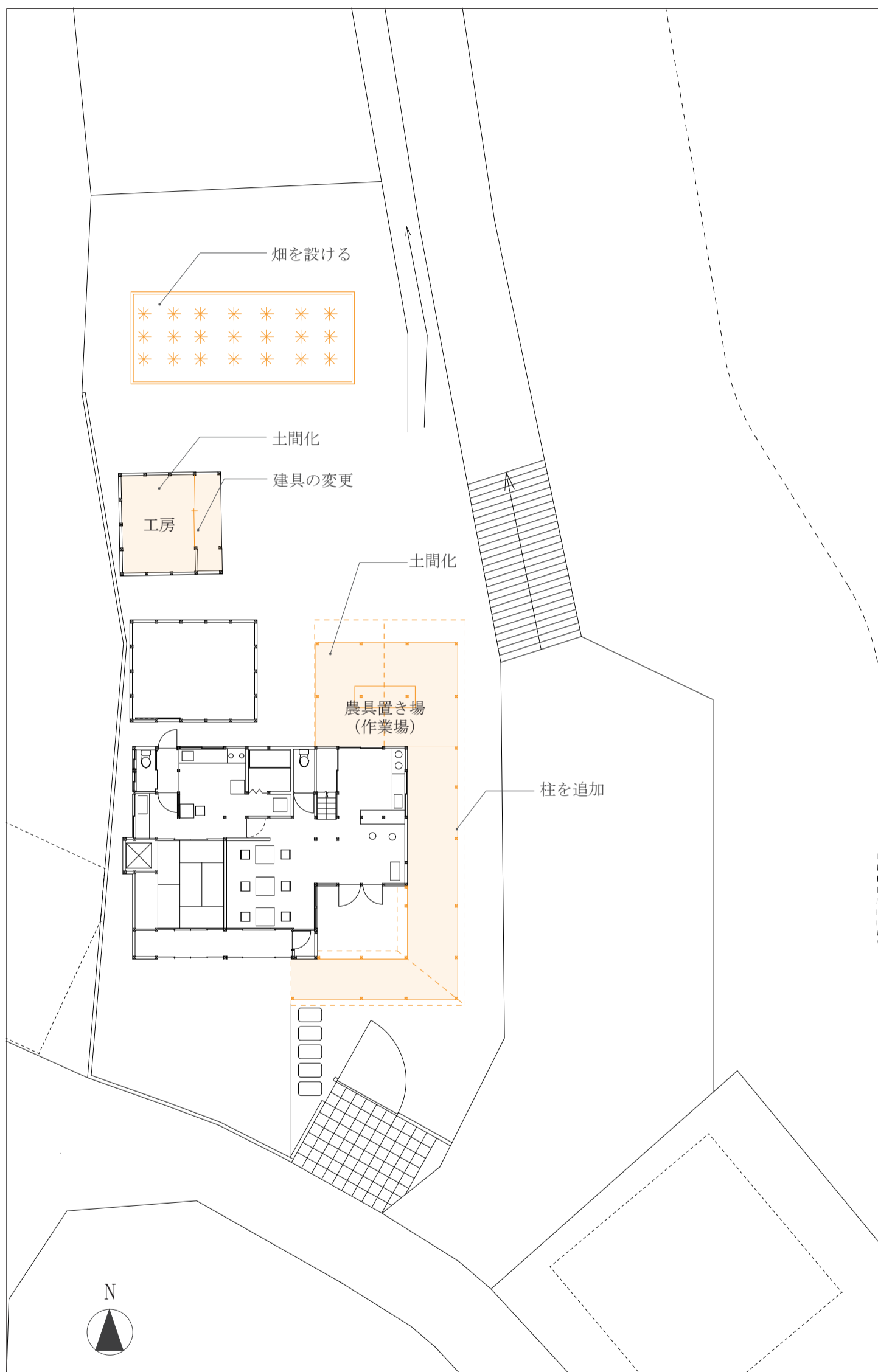


第三段階 「つなげる」 (私)

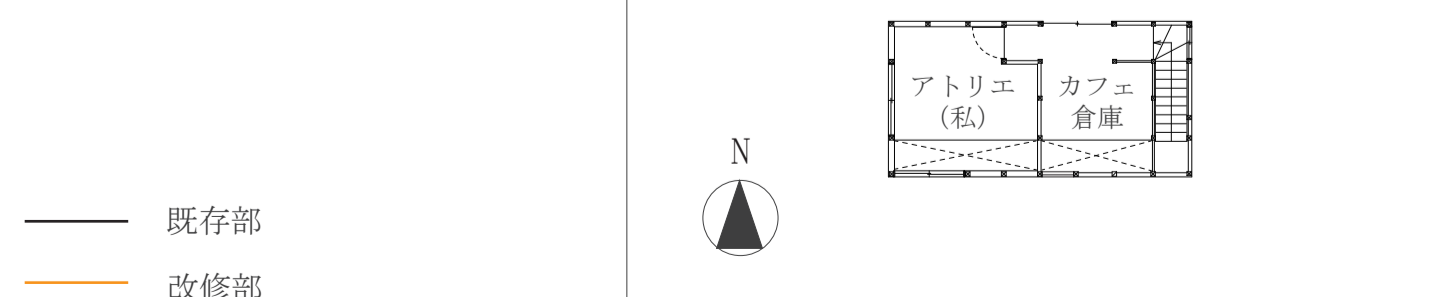


6-3. 第三段階 「つなげる」 (私)

二拠点生活の拠点として、ウラを工房や畑へとする。都市では不可能な生活を行い、2つの拠点をつなげる。そして、所有する田畑や山と家、街道と家をつなげる。



改修後 (第三段階) 配置図兼1階平面図

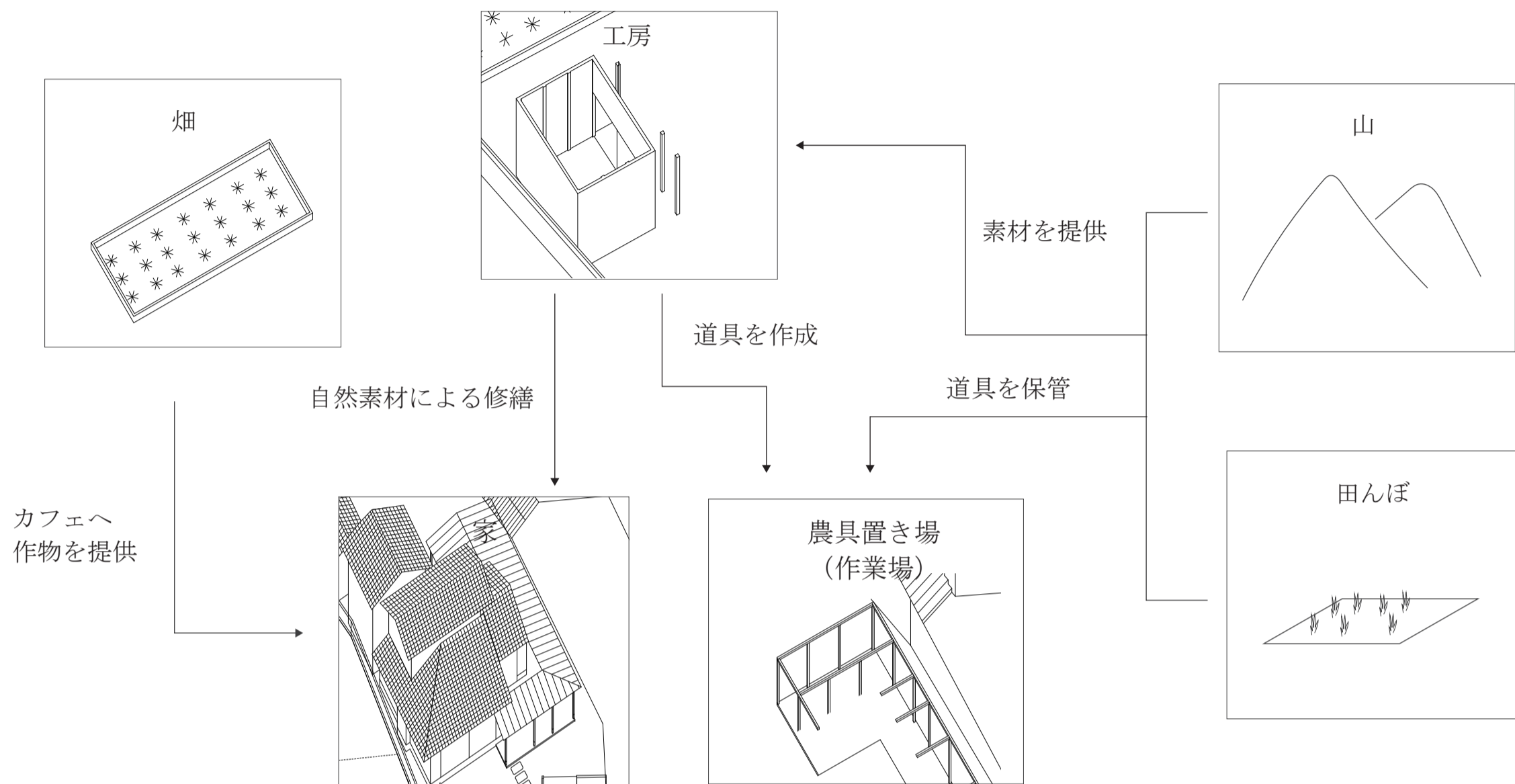


改修後 (第二段階) 2階平面図

— 既存部
— 改修部

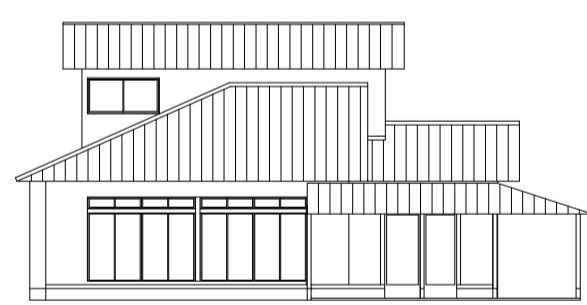
6-3-1. 山や田畑と家をつなげる

これまで、放置され続けていたウラの空間を畑や農具置き場、工房へと改修し、山や田畑とつなげる。

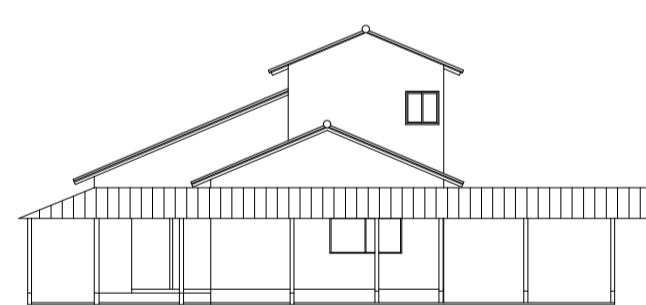


6-3-2. 街道と家をつなげる

第二段階における更新からさらに、家と街道の接続させる。ウラであった部分に、街道とつながる奥行空間を与える。

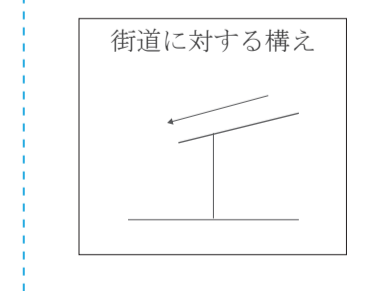
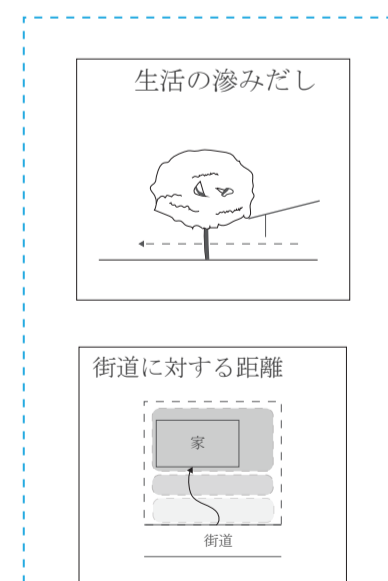
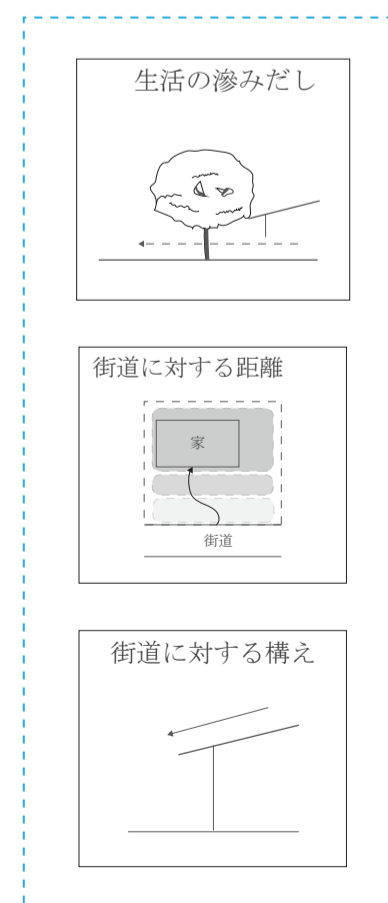
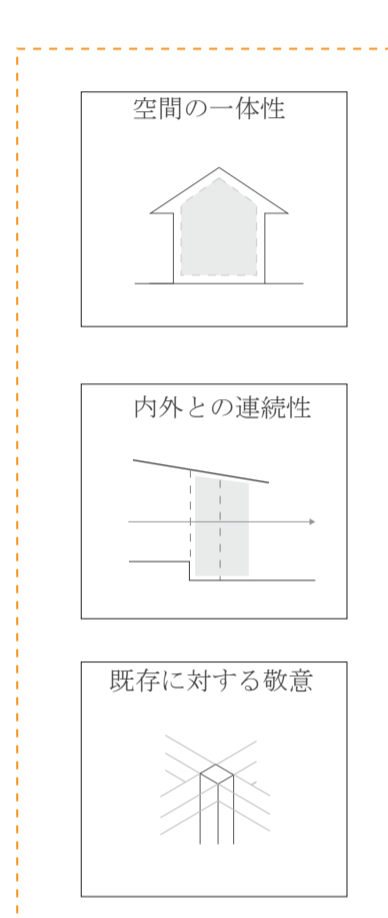
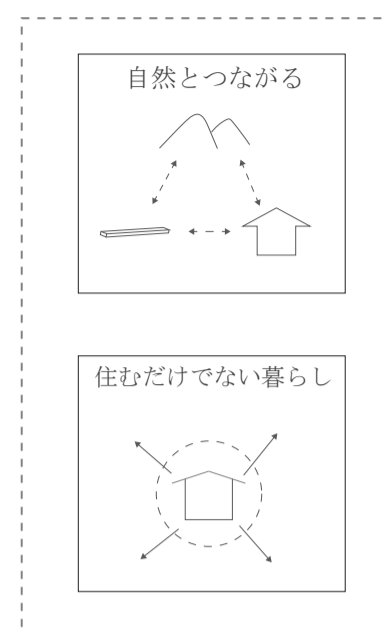
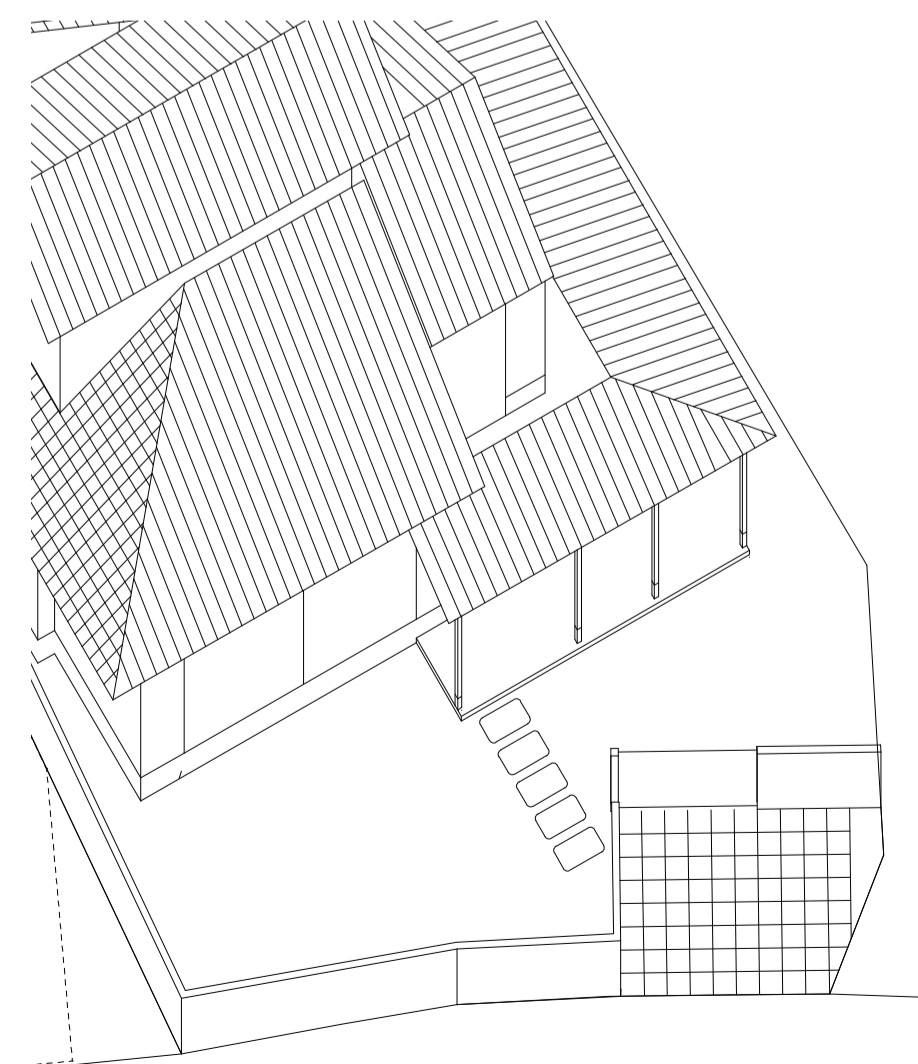
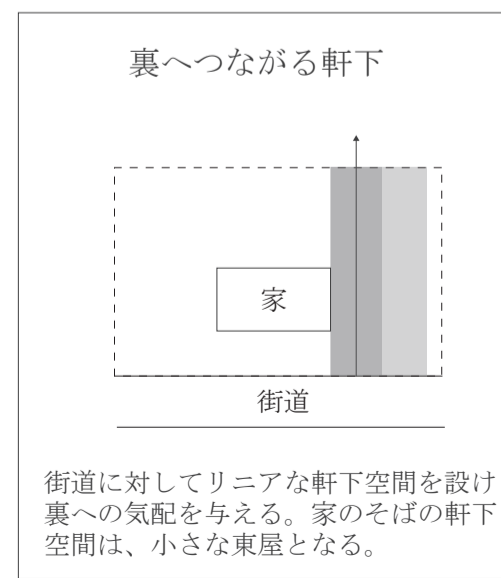
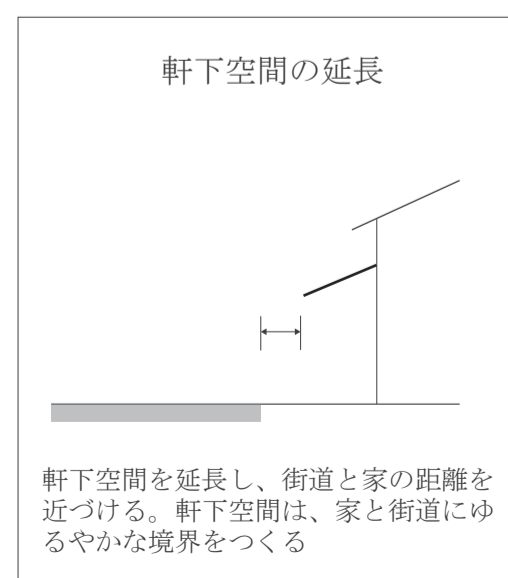


改修後 (第三段階) 南立面図



改修後 (第三段階) 東立面図

屋根 (庇) の操作



家を守るとは、形を止めることではない。

家族のバラバラな願いを、街道の長い時間に繋ぎ合わせ、絶えず書き換えていくプロセスそのものである。

歴史の詰まったこの家にあるものと、これからの生活に必要な新しいものを重ね合わせ、今日を、そして明日を繕う。

その執拗なまでに「今の暮らし」と向き合い、自ら更新し続ける背中こそが、この街の未来を指し示す、最も確かな道しるべになると信じている。